市立函館博物館

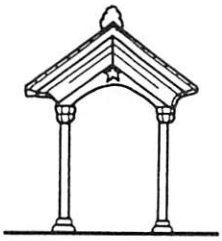
研　究　紀　要

第　5　号

1995

市立函館博物館
研　究　紀　要

第　5　号



1995

序

市立函館博物館研究紀要も，ここに第５号を発刊する運びとなりました。

このたびの紀要では，アイヌ民族資料を中心とした「児玉コレクション」の所有者であり，当館の特別研究員でもあります服飾研究者，児玉マリ氏による「アイヌの衣服」の報告をさせていただきます。このような北方諸民族における文化交流のかかわりについての研究成果が，今後の国際交流への進展にも積み重ねられることを期待し，努力いたしております。

さらに，当館考古担当，野村祐一学芸員による「立川ポイントに関する一考察」の報告をいたします。立川ポイントは当館所蔵の旧石器文化の産物であり，日本考古学史における重要な発見のひとつに数えられております。ここでは，過去に発表された報告を再検討し，立川ポイントに関する再評価を試みています。

この研究報告が，多くの方々にご活用されますよう，希望いたしますとともに，関係各位に深く感謝を申し上げ，発刊の言葉といたします。

平成７年３月31日

市立函館博物館長
木　村　　繁

目　　次

序

アイヌの衣服

児　玉　マ　リ　……　1

立川ポイントに関する一考察

野　村　祐　一　……　25

アイヌの衣服

児玉マリ

古文書に書かれているアイヌ民族の衣服は毛皮が主で，樹皮衣（アッシ）や草皮衣（レタルペ）と思われる衣服，また，和服の古着（木綿）など，あまり華やかとは思われないものがあります。ではいつころからルウンペ，チカルカルペ，カパラミヅ，チヂリなどという名前のついた，アイヌ民族独特の衣服が出来たのだろうかと考え，文書を追っかけているところです。

現在は上記の四種類の衣服とアッシやレタルペなどが，晴着として残っていて，儀式に使われたり，展示したりしています。

1600年代の文書類には毛皮が多く

1700年代でも毛皮と木綿

1800年代に入ってアッシの衣服に切伏のある図が出て来ました。

蝦夷地と一口にいっても，広いし現在のような交通があったわけでもないので，例えば松前のあたりが早く開けて，海岸沿いの漁場や港が出来，そのあたりには和人も多く住むようになり，木綿の布も手に入れやすくなるし，木綿の端裂をはぎ合せて衣服を作り，それに切伏（この切伏はアッシやレタルペには既につけられていました。）を施し，チカルカルペやルウンペを作ったものと思います。

アイヌの衣服に切伏を施すということは，北方民族の影響かと考えております。というのは，日本内地から布が入って来ておりますが，日本には衣服の上に切伏をするという技法はありません。アイヌ衣服の形は本州和服からで，切伏や刺繍は北方からと思うようになりました。ここ数年で北への窓口が大きく開かれ，資料が見られるようになったからです。

アイヌの人たちは昔から自分たちの中に伝えられているいろいろな儀式，その中でも一番大切な儀式は熊祭り，これは正確には熊の霊送りですが，昔から一般では熊祭りといっています。

また，先祖を供養する儀式も大事な行事の一つです。家を建てる時，舟を作って川に降

ろす時，秋には鮭が捕れた時などの祭事は，晴着を着て冠や刀で盛装します。今まで絶えることがなく祭事が続いたので，晴着が残っているのです。

アイヌの日常着や労働着などは，かなり早い時代に，本州の野良着のような，地味な衣服を男も女も着ている古い写真があるので，間違いないでしょう。女性は外出の時は和服を着ていましたし，男性もその時代の洋服になっています。

アイヌ民族は，北海道アイヌ，樺太（サハリン）アイヌ，千島（クリル）アイヌがいました。それぞれ住んでいた場所で近隣の民族の影響などがあり，衣服だけでなく，生活や習慣，言語など多少異なるところがあります。

衣服だけでみても，北海道アイヌには和服が入っていますし，樺太アイヌには，ウィルタやニブフ，またはその北方の大陸の影響が多分にありました。千島アイヌは，衣服として余り残っていないのですが，ロシアの婦人の着ていたような洋服や，鳥羽衣がありました。いずれにしても，今，残っていて私共の目にふれるものは，晴着として着ていたものが殆どです。

北海道アイヌの衣服について，古くは動物の毛皮を使っていた，ということが1600年代に蝦夷地を探険した外国人たちによって書き残されています。アイヌ民族は文字を持っていないので，外から見て記録されたものをたよりにします。毛皮の衣服の形はわかりません。またその記録の中に麻を着ていたとも書いてありますが，多分これは樹皮衣のアッシでしょう。

中でもフリース艦隊の記録によるものは詳しく，蝦夷地に来て，アイヌに会って，その時の様子を書いたものです。フリースの記録はそれ以後多くの人々が引用して書いていますから，かなり正確に記していたと考えられます。

江戸時代本州から蝦夷に向かった船の中にエトロフ島に漂着したのが数隻ありました。万治3年（1661），元禄6年（1694），正徳元年（1711）など，この年号は本州を出帆した時なので，漂着後，松前藩の船や，アイヌの人たちに助けられて本州に戻り，江戸幕府に報告したり，調べられたりした時の記録で，当時のエトロフ島のアイヌの生活や風俗などを書き残したもので上記の漂着記のほかにも数点あります。

正徳元年（1711）の漂着記については，私が今から30年程前にアッシ織について書いた中にも引用しています。木の皮で織ったもののことを書いた記録では古いと思われるので，その時に使ったのです。

改めて読みなおして見ると，当時のアイヌの人たちの生活や衣服がよく出ているので書き抜いて，今から280年程前奥蝦夷の衣服の素材が毛皮であったこと，今までもアイヌ民

族の衣服は，動物衣であると書いていたことの証明になると思います。

『正徳元年に大隅国分の内濱の市船、奥蝦夷ゑとろふ漂着の記』というのが正確な名称です。

ゑとろふ島に漂着してから見たアイヌ，ここでは奥蝦夷と書いていますが，場所についても，「奥州松前領蝦夷島奥夷ゑとろふと申所にて候」とあります。北海道の東蝦夷とか奥蝦夷とかいわれていたアイヌの人たちの衣服を主にして書きます。

「ゑとろふに数十日罷在候、女は髪を四方にゆりかぶり、後は首筋通りにて毛をきり、ひたいは日本のかむろの様にまゆきりに狭み切申候。身にはあしかの皮を着物にいたし、身の内少しも見せ不レ申候。毛深きを耻候哉、手足にも毛長くはへ、眉もきれ間なくはへつゝき、鼻の下ひげはへつゞき、耳にかねの輪を通しさげ、歯白く、唇に入ずみいたし、脈前より手先まで段々入墨仕、指には一筋づつ入墨致し申候。」

このように，アイヌの女性の姿と衣服が書かれています。

あしかの皮で作った衣服は，身の内を少しも見せないと書いていますので，現在のモウルかと思います。時代は100年程下り1800年初めに村上島之丞が書いた『蝦夷島奇観』（第１図）や，その後間宮林蔵や村上貞助（島之丞の息子）たちが補って作った『蝦夷生計図説』（これは『蝦夷図説』・『蝦夷産業図説』ともいわれている。）に描かれているモウウリといって水豹の皮で作った衣服でしょう。当時の『蝦夷生計図説』には，衣服を九種類描いています。そのうちの一つです。

「男女共に衣類は大鳥の皮、狐、らっこ、あしか、熊の皮にて候。裏をなめす事なく、はぎ候まゝにて、袖ぼそに仕立着用仕候。船の者共をはぎ取候て皮を着せ申候。身にこわくも當り不レ申、暖か成物にて候。男女共別て前を隠し申候。男は帯をいたし候。獵に出海に入候節はあつつふしと申物木の皮にて組たるを下帯の上に巻て見せ不レ申候。女の衣類はむねよりすそまで縫通しにて候。子供に乳を呑せ候時は裾よりむねまで衣の内をさしあげ呑せ申候。若むねをあけ乳を呑せ候時は、袖を覆ひ外より少しも身の見へぬやうにいたし候。木の皮をさき糸にして、おさにてはたを織候。」

この文章の中には，動物衣としての，大鳥の皮，狐，らっこ，あしか，それに熊の皮が出て来ます。その皮はなめすこともなく，剥ぎとったままのものを，袖ぼそに仕立てるとあります。袖ぼその衣服といえば，樺太アイヌの着ているものが，洋服風の仕立になっています。北海道アイヌが毛皮を使う時には，マタギの人たちのように着ているものが多いので，東蝦夷には樺太との往き来があったと思われます。

船乗たちも木綿の衣服は剥ぎとられて毛皮を着せられた様子も書いていたり，女の衣服

がモウルであり，子供に乳を呑ませる状態なども書かれています。この文章の中にアッシ織のことが出て来ているのです。

「女の経水無レ之、子を産候時は山に行き産いたし、其侭犬の皮に包、あと先を縄にて結つとのやうにいたしひっさげ歩行候へ共、然に鳴きも不レ致候。赤子より背通りには黒き毛一通りはへ有レ致候。産致し候女直に薪を取働いたし歸申候。子供の着物は大方犬の皮にて候。」

当時のアイヌ女性のお産を書いていますが，子供が生まれたら犬の皮に包んだり，子供の衣服が犬の皮であると書いています。

この漂着記には，衣類のことは勿論であるが，実に細かに観察していますが，まだ当時は，動物衣が主で，後にアイヌの人たちによって作られる文様の施された衣服は全然あらわれてきていません。

先に袖ぼその衣服というところでちょっと書きましたが，アイヌ民族の衣服は，殆どが前開きで，和服に似ているのですが，和服の古着を使っているものは別として，アイヌ衣服には，衽がありません。衿も和服のような棒衿はついていません。非常にシンプルな形なのです。袖はもぢり袖・筒袖・和人袖があります。これは北海道アイヌにも，樺太アイヌにもあります。但，樺太アイヌには，袖のほそい衣服は動物衣だけではありません。植物衣のアッシにも，よく見ることが出来ます。これは，樺太アイヌが，ウィルタやニブフのほか対岸の諸民族とも交りがあったので洋服の感覚から入ったものと思われます。

ちなみに，樺太の衣服には，衿が中国服の衿，チャイニーズカラーになっているもの，前が釦止になっているもの，また，中国にもよくある紐で組んで，釦状の玉にしたものと，それを引っかけるループ状の紐がセットになっているものもあります。

アイヌ民族の衣服を，素材別に書き出すと下記のようになります。

(1)動物衣　陸獣　くま　しか　きつね　いぬ　たぬき　うさぎ
　　海獣　あざらし　らっこ　あしか　おっとせい　とど
　　魚類　いとう　からふとます　さけ
　　鳥類　エトピリカ　うみう　かも　あほうどり

(2)植物衣　樹皮衣　おひょう　しなのき　はるにれ
　　草皮衣　いらくさ

(3)外来衣　本州からの布

木綿の古裂

中国および北方からの布

唐木綿　唐絹　山丹裂　更紗

既製服

本州からの陣羽織　小袖　和服の古着

中国からの山丹服

(1)の動物衣と(2)の植物衣は，アイヌ民族が生活している場所で調達出来たものです。特に，動物については，毛皮は衣類や服飾品，靴などにしていますし，肉や内臓は食用に，角や骨は，狩猟具や日常の道具や縫針になっています。漂着記によると皮はなめさずに剥いだまま縫っていると書いているので，毛皮は簡単に衣服として身にまとったことになります。

植物衣のことは漂着記には出て来ませんが木の皮で織ったものを「あつつふし」といって使っているとあります。季節にもよるのでしょうが，衣服としてアツシを着てはいなかったようです。

漂着記の中に船乗たちの着ていたものを脱がせて，毛皮を着せたという文章があり，前にも書きましたが，別のところに，「私共の衣類迄も剥取り候云々」とあり，また，「剥取候衣類は位のよき者共着仕候。下々にてもまれに一つは着仕候。」などとも書いています。船乗たちの衣服は男物の和服であるので，それは，アイヌの人たちの中でも位のよい者，つまり首長格の者が着たのでしょう。この時代は，漂着した者たちから木綿の衣服や布を手に入れて，ここには出ていないが，アツシの衣服の覆輪に用いたのでないかと想像しています。

本州との交易が盛んになった1700年後半になると幕府の役人や一行に加わって，医者，地理学者，絵師などが蝦夷地へ渡って来て，江戸への報告を兼ねて旅の日記や絵を残しています。この人たちも樹皮衣以外の木綿の古着などは本州で見馴れた衣服として，別に書き記すこともなかったものと推察されます。

ともあれ，木綿の古裂や古着は交易で入っていたのは，はっきりしています。アイヌ民族独特のチカルカルペ，ルウンペ，カパラミァ・チヂリなどが作られるのは，まだまだ先のことで，1800年初めの『蝦夷島奇観』（村上島之丞）にも男夷の図，女夷の図がありますが，これは両方ともアツシの盛装です。

前にも書いた『蝦夷生計図説』は，前記のエトロフ島漂着記から100年程下った1800年初めに完成しています。内容はアイヌ民族によって作られる木幣のこと，農耕のこと，舟造りのこと，アツシ織のこと，家造りのこと，それにアイヌ民族の中にあるしきたりを書いたものなど，八項目に分かれているのですが，私にはアツシカルの部が一番大事なところです。

アツシカルの部にはアツシ織のことだけでなく，最初に衣服のことについて書かれているのです。書出しには，「凡夷人の服とするもの九種あり…」として当時の衣服九種類の名を揚げています。

（一）ジツトク	蝦夷錦と陣羽織
（二）シャランベ	絹の古着
（三）チミツプ	木綿の古着
（四）アツトシ	樹皮衣
（五）イタラッペ（イラクサ）	草皮衣
（六）モウウリ	水豹の衣
（七）ウリ	獣皮衣
（八）ラプリ	鳥羽衣
（九）ケラ	草で編んだ袖無

ジツトクには二種類あって本州から渡って来た錦繡の陣羽織と，サンタン人がカラフト嶋に持って来た明服（ミンブク）（山丹服・蝦夷錦）。

シャランベ　　本邦から入った古い絹の衣服

チミツプ　　本邦から入った古い木綿衣

アツトシ・イタラッペ・モウウリ・ウリ・ラプリ・ケラの六種は全部夷人が作るものであるが，そのうち，アツトシとイタラッペは夷人が機杼で製するものなので上品の部類に入れて，祭りの時や貴人に謁見するなどの礼式に，ジツトク・シャランベ・チミツプがない時にはアツトシだけを着ることになります。

獣皮や鳥羽などで作った衣はかたく禁じていることが，書いてあります。

面白いことに前記九種のうちジツトクは蝦夷錦といって，本邦の人が熟知しているものであると書いていることです。蝦夷錦は蝦夷地の松前藩の手に入り，多くは江戸に行ってしまったのでしょう。シャランベとチミツプの二種類は本邦のものなので，この三種は図

を描かないとあります。

モウウリ・ウリ・ラプリ・ケラの図は描いてありますし，アツシカルの部というだけあってアツトシのことは詳しく図と共に書いています。

おひょうの木を探しに山へ行き，皮を剥いで内皮を沼か温泉につけ，柔かくなったらよく洗って，乾かして糸で紡いで，糸玉を作り，それを機織にかけて織ります。織り終ったら，反物で衣服を作ること，身頃を縫って，袖を縫って，図に切伏布をつけた背中の図を描いてあります。200年前にアイヌの人たちがしていたアツシを作るさまざまな工程は今も変りなく行われています。織機も当時と全く同じです。

アイヌ文様の施された木綿衣がルウンペ，チカルカルペ，カパラミヅ，チヂリが作られはじめたのは今から170年程前のことと私は考えております。そして地方差のはっきりした衣服がくずれだしたのが，1950年位と考えて，その期間は余り長くなかったように思います。ちょっと大胆すぎる考え方かもしれないし，今後新しい発見をなさる研究者が出て下さることも考えての問題を投げかけてみました。

アイヌの四種類の木綿衣とその地方差について書きます。

黒裂置文衣（チカルカルペ）

北海道内で割合多い場所で見られた衣服で，今のところ大きく三つのパターンがありますが，全体として黒または紺の木綿の直線裁にして，衣服の生地に切伏をして，その上に刺繍をしているので，下の生地によっては，樹皮で作ったアツシによく似ていて，写真だけで間違ったこともあります。多分昔はアツシに似せて作ったのでしょう。

(1)　日高西部，沙流川筋のチカルカルペ

生地には，真岡木綿の柄物を使い，背面上部と腰部の間には切伏も刺繍もしない場所があります。前面の上，胸には文様がなく，黒い布を掛衿風に切伏しています。それから裾先の刺繍文様にも特徴がみられます。

このチカルカルペも最近は胸に文様をつけたり，裾先の文様に変化をつけたりして，くずれてきています。（第２図）

(2)　日高東部，静内地方のチカルカルペ

厚手の木綿の縦縞を使っている衣服が多く，切伏文様は黒か紺の木綿の直線裁の布を衣服の生地が見えない程前も後も上から下まで切伏して切伏布の間隔もせまい。この形の衣服は東静内旧家で何枚も見せて頂きこの附近の文様と判断したのが約40年前の話です。（第３図）

(3)　北海道西海岸のチカルカルペ

前に述べた二つの地方のものは，アイヌ独特の衣服に切伏を施したチカルカルペですが，北海道西海岸というのは稚内から江差，松前あたりまで漁場や廻船問屋が点々とあって，和人も多くいたせいか，もともと男物の和服に切伏文様を置き刺繍を施しているものがあります。おそらく漁場の親方衆や廻船問屋の旦那方が，アイヌの女性に頼んで文様を入れてもらったものと思われます。現在残っているものは手入れが良く，傷みの少ない衣服がかなり旧家に保存されていますし着古してどうにもならない衣服もみられます。

この衣服の切伏布は，巾がせまく間隔を広くあけており，刺繍も切伏布と同系色を使ったりしています。（第4図）

色裂置文衣（ルウンペ）

アイヌの木綿衣の中でも最も華やかな衣服で，大変手間のかかっている衣服です。場所は北海道でも南の噴火湾沿いにあった衣服と，噴火湾をはずれて白老地方にもあります。

この衣服は実際に物があって名称がわからないものと，名称は知っていても実物がないものがありましたが，八雲，虻田などの有名なアイヌが持っていた衣服がわかったり，名前がわからないが，確実に虻田で手に入れたことを書き残している記録があったりして，判明したものです。（第5図）

衣服は切伏布に絹の裂を用い，その裂を止めている糸は，植物繊維のオヒョウかイラクサで作った糸です。この衣服の出所はわかりませんが，噴火湾のものによく似ています。

白老方面の衣服は，背面上部に色裂，絹やメリンスなどの小巾の四角形の中に納まる文様を一つつけて周囲に文様を施します。腰の所に衣服の生地とは全然異なる布をはさんで丈を出しているような感じが特徴の一つです。（第6図）

市立函館博物館所蔵の八雲のルウンペには，樺太または大陸で毛皮や魚皮衣につける文様が施され，樺太風の色使いのものがあります。（第7図）

ルウンペには，平絹の白，空色，紅絹（モミ），メリンス，更紗，唐木綿などが使われており，何らかの形で北方との交流が感じられます。

白布切抜文衣（カパラミㇷ゚）

今まで記した二種の木綿衣より新しいもので，白い大巾の布がアイヌの人たちが充分使えるようになった明治末から大正時代にかけて静内地方で作りはじめた衣服です。大巾布を衣服の生地一杯に，これには縦にして背面から前の胸の下あたりまで続けて布を使った

り，腰の部分で，前から後を通り前までくる横地をぐるっとつける方法とがあり，生地につける前に切紙細工のように二つ，四つに折りたたんだ布にハサミで切目を入れて，衣服につけてからその部分を折込んだり，切りとったりして文様にしています。大胆な大きい文様が特徴です。カパラミァを作る時代になると，専門に衣服を作って骨董屋に渡していたなどと噂される人も出て来て同じような文様の衣服が出廻ってきていました。（第8図）

刺繍衣（チヂリ）

この衣服は，唯一切伏のない刺繍だけの衣服です。文様のパターンはチカルカルペと同じ，つまりチカルカルペから切伏をとったものと考えると，地方差も出て来ます。普通は一色の糸で刺繍をするのですが，この衣服は北へ行く程色糸を多く使います。樺太にもこの種の衣服があって，樺太のは大陸の影響のみられる色使いです。（第9図）

衣服の形や針，そして縫い方について書きます。

アイヌの衣服は，丈が短く膝下10cmくらいのものが古い時代のものでしたが，だんだん長くなって今ではくるぶしまで丈が来てしまいました。短い丈に脚絆をつけていたのですが，脚絆はみえなくなってしまっています。

アイヌ本来の衣服は，和服で説明すると簡単で，和服から衽や衿を除き，後に三ツ衿をつけたりしたものです。仕立てる時の縫い方は，中表に耳と耳を合せて，絡縫とか巻縫というようにしてあります。いわゆる並縫が出来るようになったのは，針が運針に適した短いものが手に入るようになってからだと思います。江戸時代はアツシを縫う針は，フトン針のような太くて長いものだったと書いてあります。

切伏の上にする刺繍は，コードステッチとか，コーチングステッチという，布に糸を一本置いて，それを絡んで止める方法とチェーンステッチが主な技法で，それにフェザーステッチもあり，あとは適当に刺しているところもあり，針の向くまま途中で技法が変ったりしています。フランス刺繍にあるチェーンステッチやコードステッチなどは，本州では大正年間に入って来た技術でアイヌ衣服にはかなり古くからこの刺繍があるということは，やはり北から入って来たのでしょうか。

樹皮衣（アツシ）が出来るまでを簡単に書きましょう。30年前に記録映画を撮るために山に入り木を剥がすところも一緒に作業してきた様子も含めています。

アツシにする木は，楡科のオヒョウの木です。春先に山に入り若木を立木のまま剥ぎ上

げます。その場で外皮を取ってしまい，繊維質の内皮を持ち帰り，沼に漬けます。昔は少し遠くても温泉に行って漬けたということです。何日か経て内皮が熟成すると数枚に分かれます。ヌメリの多い繊維ですので，川の流れでよく洗いヌメリを除いて乾燥させます。生の時一枚だった内皮は四〜五枚の繊維になります。乾いたら手でほそくさきながら結んで長くして，糸玉を作ります。糸をかける織機は，本州の原始機によく似た構造で，機台ではなく，筬は糸を並べるために織手から見て一番遠い場所にあります。糸を織る時に締めるのはヘラです。いざり機と異なるところです。経糸は織るのに必要な長さ一杯にのばします。経糸は前方の杭と織手の前の横の棒との間にのばします。織手は横の棒を前にして体の後からまわした腰当に棒を引っかけて体を糸で張ったり，ゆるめたりして横糸を入れて織って行きます。織上がった分は巻きながら前に進んで行き前方の筬が動かなくなった時が織上がりです。（第10図，第11図，第12図）

アイヌの女性は機で布を織り，衣服に仕立て最愛の人に着てもらい，祭りの時など皆にほめられるのが最も喜ばしい時だといっています。アッシに限らずルウンペでも，チカルカルペでも本当に一生懸命作ったそうです。でもやはり昔から手の器用でない女性はいたようですし，文様の浮かんでこない女性もいたのでしょう。下絵にあたる下縫だけをしてもらったり，また衣服を仕立ててもらったという話もきいております。

つぎに昭和42年に『北海道文化』に書いた「アッシ織機とその操作について」からアッシ織りの機具を紹介します。

アッシ織の機具

アッシ織の機具を総称してアッシカルペという。アッシを織ることがアッシカルであり，ペは物という意味である。またアッシシタイキともいわれている。これは織る時にヘラで緯糸を叩きつけるようにして締めるので「打ちつける」という意味からこのようにいわれているのである。

機具は次の八個（第13図）の部分から構成されている。いずれも木や竹で作られているものである。

1．筬（ウオサ）
2．上下糸分離器（カマカップ）
3．綜絖棒（ペカウンニ）
4．箆（アッシペラ）

5．緯糸巻棒（アフンカニ）
6．布巻取棒（イツマムニ）
7．腰当（イシトムシニ）
8．経糸巻杭（ウライニ）

1．ウオサ　筬

アツシ織機の場合のこのウオサ（第14図）は単に経糸を並列するためのものである。ウオサの一つの目の中に二本の経糸がくぐり，この二本は次のカマカップによって上糸下糸に分かれる。ウオサの目の数は古いもので150から190ぐらいであり，新しいものは130前後である。このウオサの枠は木で作られ，中の目になる部分は竹をほそく割ったもので作られている。古いものには木の枠に彫刻しているものもあり，また一本一本の竹もほそいものが多い。ウオサの長さは45cmから55cm，高さは10cmから14，5cmぐらいである。ウオサは織手から最も遠いところにあり，現在日本の機織に使われている緯打ち具の役目はしていない。『アイヌ芸術服装篇』（杉山寿栄男）に古い筬は木の板の上下に穴をあけてあるものや，木で筬の目の部分があらく作られたものなどがあると出ているが，実際にはこういうものは殆ど見られない。

筬の木の枠にある竹の部分の作り方であるが，この部分はアイヌのゴザ編機のイテセニにかけて作るのである。竹をほそく割ったものの両端をスダレを編むようにして作るのである。丈夫な木綿糸を使って，間隔を0.1cmか，0.2cmぐらいにあけて編むのである。

2．カマカップ　上下糸分離器（開口具）

ウオサから出た経糸群はカマカップ（第15図）によって上糸下糸の群に分けられて，常にカマカップの高さの分だけ開口されているのである。このカマカップは原始機やいざり機の中筒にあたるものである。カマカップには種々の型があって，両端に三角形の枝か，またローマ字Tを逆にした形の木に三本の棒（直径1cmで長さ45cmぐらい）を上に一本下に二本わたしたもの，また四角で棒が四本のもの，机型のものもある。机型のものは前記の棒の部分が上下二枚の板になっているものである。カマカップという名称は糸を開くものという意味である。ほかにクッタル（近文）クトウ（帯広）とも呼ばれている。木材で作られたものは，イタヤカエデの木或はサビタの木で作られているものが多い。長さは45cmから50cmである。そのほかにクッタルと呼ばれているものに，円筒形で中が空洞になっているものがある。これはイタドリ，オオイタドリなどの茎を乾燥して作られたものである。

『東夷物産誌』という古い文献に「シフキナ」で「夷人或は截て矢筒を作り、また機織の具となす」と記されている。クッタルは直径5cmから7cmぐらいのものを使う。長さは45cmから50cmぐらいである。

3．ペカウンニ　綜絖棒　開口具

これは一本または二本の棒に（第16図）木綿糸（漁網の綿糸）をつけて，経糸の下糸を引上げ，上糸下糸を交叉させるために用いるものである。この綜絖を手で動かすということは，日本の弥生時代の原始機にもあったが，今でも手で動かしているというのは珍しいことである。なお本邦のいざり機では足を使って綜絖を動かすので，手をもって動かすアイヌのアッシ機より新しいものである。アッシ機では，カマカップによって上下の糸は常に開口されており，綜絖を用いて交叉開口するのは下糸だけである。半綜・中筒・開口の織機であり，この点原始機と同じである。

ペカウンニの棒に使う材料は長さ45cmから50cmぐらいの木で，直径1cmぐらいのほそいものである。そのほか一本のほそい枝を中央でまげて一方が輪になっているものや枝の先の二股になっているところを利用したものもある。棒につける糸をペカカといって現在では木綿糸や漁網の糸のほそいものを使っているが，昔はハイ（イラクサ）を使っていたともいわれている。アッシを織るために上糸下糸を何回も交叉させるので丈夫なものでなければならない。このペカウンニに下糸をすくった糸をかける方法にはいろいろなやりかたがある。たとえば二本の棒を一緒に使って，下糸をすくってきた糸をローマ字のO字状にからませたり，二本の棒に8字型に糸をからませる方法もあり，また二本のうち一本だけを使って糸をからませて下糸をすくいあがってきた糸は棒で二回巻いてから下糸へおりる。そして全部の糸をかけてから両端でもう一本の棒をしばって使う。この場合には二本の棒の下にだけペカカがついているのである。この糸のかけかたは織る人が自分でかけやすいように糸を扱うので，決まっているものではない。アッシを織り終ったらペカウンニの糸はほどいてしまうので，糸をかけたままの古いものは残っていないのである。

4．アッシペラ　筬

これは（第17図）緯糸を通す時に入れやすくするために上糸下糸の間に入れてから立てて開口するものである。こうして緯糸を通したら，これをアッシペラで叩きつけるようにして締める。またこのアッシペラの用途として，上糸下糸を交叉させる時に，左手でペカウンニを持上げ，右手のアッシペラでペカウンニの向こう側をなでるようにして上糸が下に落ち，交叉しやすくするという役目もある。材料にはイタヤカエデ（アイヌ名トペニ）のようにかたい木を用いる。また適当な重さも必要である。長さはアッシペラのへらの部

分が50cmから55cmぐらいで，柄が12cmぐらいである。幅は10cmから12cmで両側の刃の部分は薄く中央部で厚さ2cmぐらいである。このアツシペラはかたい木で作られるのであるが緯糸を締めるのに相当の力と勢いをつけるので，アツシペラの刃のところには糸のきざみあとがつき，鋸歯状を呈していることが多い。

日本の原始機とアツシ織機とは，似ている点が多いといわれているが，その中でも，このアツシペラと原始機の刀杼といわれるものが，同じ役目のもので，経糸の中に入れた緯糸を打つことと，緯糸巻棒を通しやすくするために経糸の間を開口するのに使ったのである。原始機で刀杼といわれるものには，大きくわけて型が二つある。一つはアツシペラと同じ剣形の篦であり，これは全長70cm（柄の部分も含む）で幅は割合せまく6cmぐらいである。もう一つのものは，打込みに使う部分は直線で鋭く削り刃状になっており，他の一方のみねは厚く舟底型にカーブしているのである。これらの多くは登呂の遺跡から出土しているものである。

我が国の刀杼は，織機が発達してきた現在では，緯打具が筬に変ってしまって残っていない。ただ一つだけ八丈島のカッペタ織に見ることができるのである。

つぎに外国で篦を使って織物をしている民族は，アメリカン・インディアンの一部にあり，ミクロネジアのカロリン諸島やクサイエ島，インドネシアのバリ島，東南アジアの海南島であり，また台湾では，タイヤル族，アミ族，パイワン族などである。ほかにメキシコの高地に住むインディオも篦の形は大体アイヌのアツシペラに似ているが，長さや幅などは織物によって異なっていることは言をまたない。

5．アフンカニ　緯糸巻棒

アフンカニ（第18図）は緯糸を巻いて経糸の中にくり入れる道具である。棒の両端が二股になってその先をつぼめ壷形を呈している。この形のものはアフンカニのために作られたものであり古いものに多いが，今では一本の棒に緯糸を巻きつけて使っている。長さは40cm程度のものである。形によって緯糸の巻きかたが変ってくる。アフンカニとは，中に入る糸の木という意味がある。

6．イツマムニ　布巻取棒

このイツマムニ（第19図）はアツシ織の最初に糸を張る即ち経糸を最初にのばす時に使うところの基になる一本の棒と，織物がたまってきたら巻取りながら使う他の一本の棒と，合せて二本の棒からなるものである。この二本を次に記す腰当についている紐に引っかけて織手の体につけるのである。木はかたいものがよく，直径1.5cmから2cmぐらい，長さは40cmから50cmぐらいである。木のほかに竹でもよい。腰当の紐を二本の棒にかける

時に，織物が織っている最中に戻ったり，またゆるんだりしないように引っかけるのである。

7．イシトムシニ　腰当

イシトムシニ（第20図）は織手の背面で腰のところにあてる木であるが，前記のイツマムニに紐で引っかけて，織物を張ったり，またゆるめたりする道具である。材料には，桑の木のように，湯の中に入れて曲げやすいものを用いる。腰当は使う人の体型によって，長さや幅もまちまちであり，また木のカーブもいろいろである。たとえば幅などは後中央部を12cmぐらいにして，両端はせまく7，8cmにしたものもあるし，また全部同じ幅でせまく作っているものもある。木の両端に，たてに二つの穴をあけて紐を通して輪にしておく。また現在ではあまり見られないが，腰当を木の代りにタラという編んだ縄，幅7，8cmのものを用いたこともある。

8．ウライニ　経糸巻杭

アイヌの織機では，経糸群の先端はループとなり，一本の杭に引っかけられている。経糸の最初の一本はウライニに結びつけて，次の経糸からはウライニをまわり，最後の経糸がまたウライニに結びつけられている。そして全部の経糸をたばねて結んでおくのである。経糸が一本の杭に集められているのに対し，原始機では経糸群は二板長板の経巻具に巻きつけられている。これが両者の大なる相違点である。

この経糸巻杭の長さは決まっていない。直径5cmぐらいよりほそいものであればよい。あまり太いものは使われていないようである。この杭は特に細工されたようなものはなく，有合せの木を使っているのが多い。

以上八個の織具を記したが，ウオサ，カマカップ，アツシペラ，イシトムシニは最初からそのものに使用するために作られたものであるが，ウライニ，ペカウンニ，アフンカニ，イツマムニなどは有合せの棒や真直ぐな枝などを用いたものがある。

アツシの経糸を張る最初から織り終るまで経糸からはなれないものは，ウオサ，カマカップ，イツマムニ，ペカウンニ，ウライニであり，アツシペラとアフンカニは張られた経糸の中に使われているものである。

草皮衣（レタルペ）

樺太にもアハルシ（北海道のアツシ）やイラクサの繊維のレタルペなどがあります。樺太と北海道との往来は私共が考えているよりもっとあったようです。樺太の刺繍の色使いは大陸の影響でしょうか明るい色が多くみられます。縫針も大陸から入って来たのでしょ

う。糸もつやのあるほそい糸なので針目も細かく刺しています。衣服の衿は中国風のチャイニーズカラーがあったり，普通のアハルシの衿も北海道よりは衿が高く，三ツ衿も部分を糸で刺していたり，ほそい別布をつけていたりして衿にアクセントをつけています。またアハルシの刺繍も北海道の切伏の上だけでまとめているのでなく，アハルシの生地の上にも刺繍をしていたり，刺繍糸も緑色や茶色のものがあります。（第21図）

男の服装・女の盛装

男性は晴着の上に本州から入った陣羽織を着て，頭には木の皮を削って作った冠をかぶり，刀は刀掛帯に通して右肩からかけ左腰に納まるようにします。

女性はモウルというワンピース状の下着（人前にはこのままでは出ないという日常着）の上に晴着を着て，頭は鉢巻状のもので必ずしばります。地方によって鉢巻の長さが異なります。

咽喉のところに小さな布製のものをつけます。耳には耳輪を（これは幼い時から耳たぶに穴をあけています。子供の時は赤の絹の裂をさげていたそうです。）さげ，玉を連ねた首飾りをかけます。女性にとって首飾り玉は宝物なのです。

山丹服

ここ10年程よく山丹交易のことが出て来ます。江戸時代，日本が鎖国していたころ，北の方では対岸の黒龍江下流の少数民族ウリチ族やギリヤーク（ニブフ），樺太アイヌや，北海道アイヌなどが，交易していました。アイヌ民族は黒テンや他の毛皮と引き換えに，耳輪，腕輪のような金属の装飾品と青玉といわれる大小さまざまの玉と絹製品の山丹服や山丹裂などを入手しました。この山丹交易によって入手した中国の官服は，のちに本州にもたらされ，和人から「蝦夷錦」としてもてはやされました。

北海道には山丹裂の二次加工されたものがあります。山丹交易に直接かかわったといわれているアイヌ民族の中には山丹裂で作られたものは見あたりません。裂や山丹服は和人の手に渡ってしまったのでしょう。

アイヌ民族の衣服にかかわって四半世紀がすぎてしまいました。幼い頃から父の集めたアイヌ民具の中で育った私に，父はアイヌ女性の仕事を同姓の目で見て，実際に手がけ，少し書いてみては，とすすめてくれましたので父の言葉に従って，今まで，アツシ織をはじめ，衣服のことをやっているのです。勿論私は衣服が大好きだということもありますが。

父は衣服を相当な数集めていましたし，参考になる古文献から新しい本まで用意して，1970年他界しました。父の資料は，故郷である函館の博物館に寄託し，約10年かかって整理され図録も作って頂きました。今では，博物館の資料や馬場コレクションと一緒に，北方民族資料館に展示されています。函館というところも旧友の馬場先生も，父にとっては長いお付き合いなので，そこに一緒にして頂き，私も毎月父の資料に会いにくることが出来るのは幸せです。今回の紀要については，私昨年秋から右手に痛みがあり殆ど書くことが出来ない状態だったので，間に合せるため，以前書きためておいたものや，衣服の地方差などは，昨夏，遠野の博物館の展示図録に書いたものを使いました。博物館の若い方々には，いろいろと御迷惑をかけてしまいました。

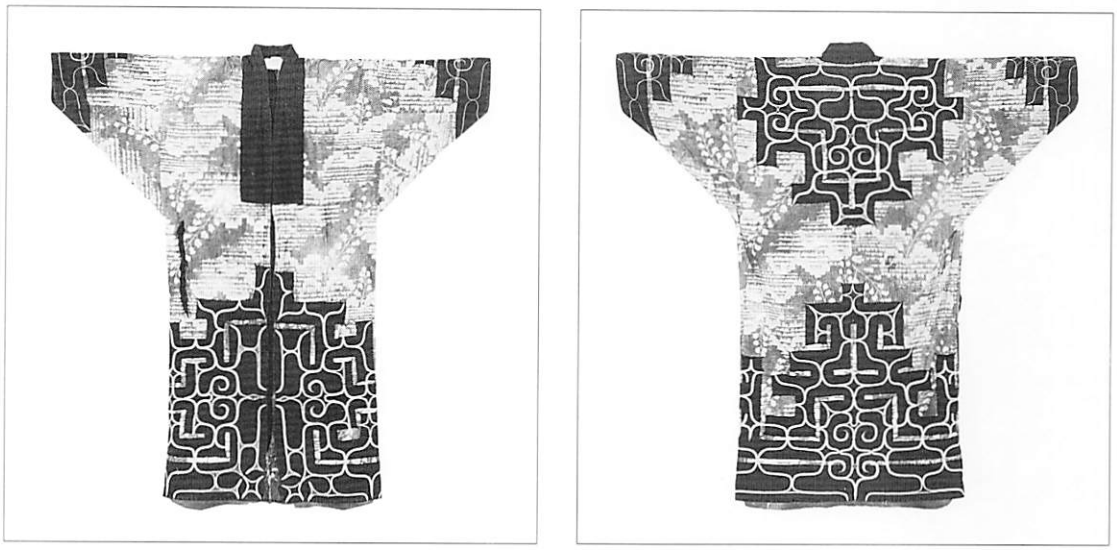
「アッシ」について一言書き添えます。現在はアイヌ語の発音や書き方について，細かくいわれ「アットゥシ」「アッツシ」と書かれますが，私が最初に書いた「アッシ織とその操作」をアッシで書いているので，アッシに統一しました。

（市立函館博物館特別研究員）

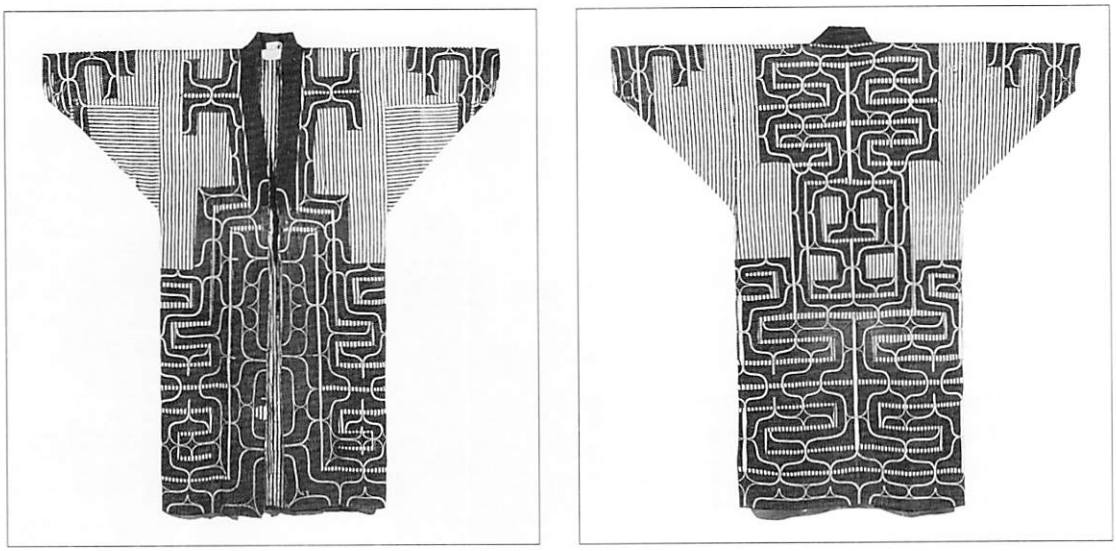
［引用・参考文献］

マールテン・G・フリース『フリースの探検記録』寛永20年（1643）。
村上島之丞（秦　檍丸）『蝦夷島奇観』寛政末－文化元年（1799－1804）。
秦　檍丸（村上島之丞）・間宮倫宗・秦　貞廉（村上貞助）『蝦夷生計図説』文政6年（1823）。
聊　睡庵『正徳元年に大隅国分の内濱の市船、奥蝦夷ゑとろふ漂着の記』正徳元年（1711）。
角山幸洋『日本染織発達史』昭和40年（1965）。
Harold E. Driver: Indians of North America 1961.
染木　煦『ミクロネジアの風土と民具』昭和20年（1945）。
改造社版『日本地理体系（台湾篇）』昭和5年（1930）。
児玉マリ「アッシ織とその操作について」『北海道の文化』第11号，昭和42年（1967）。

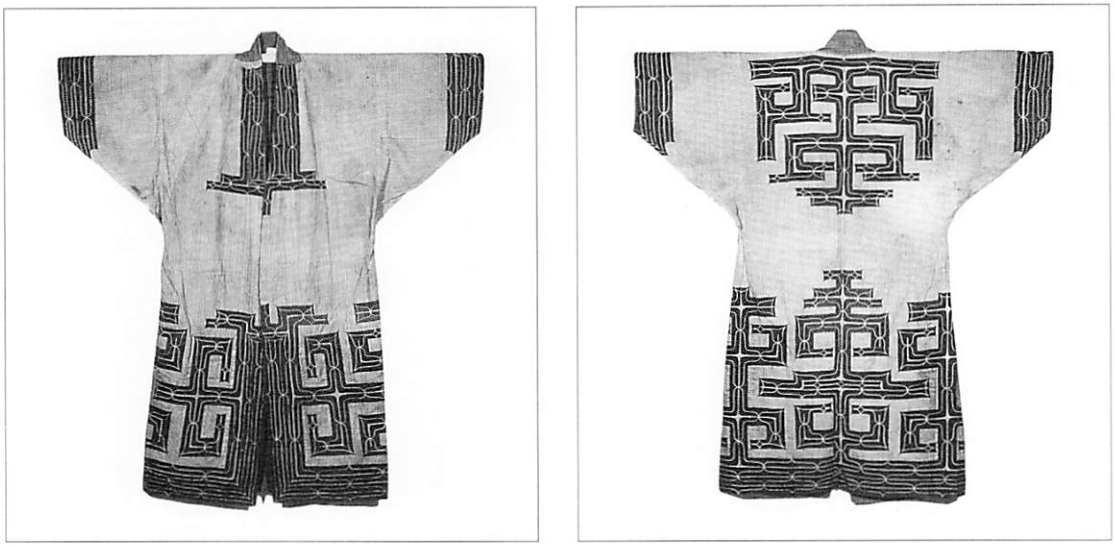
第１図　『蝦夷島奇観』から「タフカルの図」左端にラプル（鳥羽衣），右端には獣皮衣，その他にもアツシ，草衣，紋付，小袖などが描かれている。



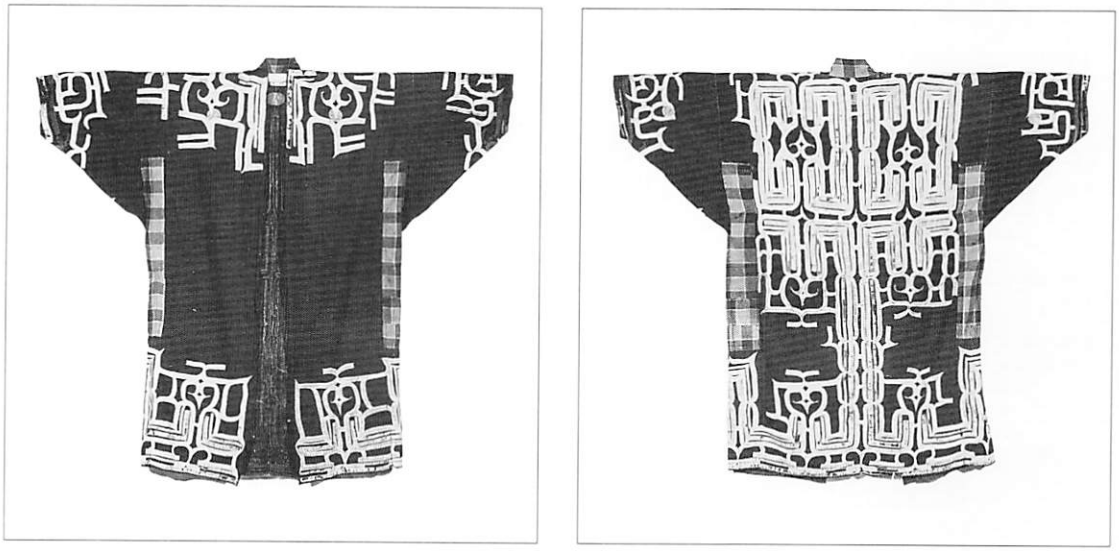
第２図　チカルカルペ　前，後



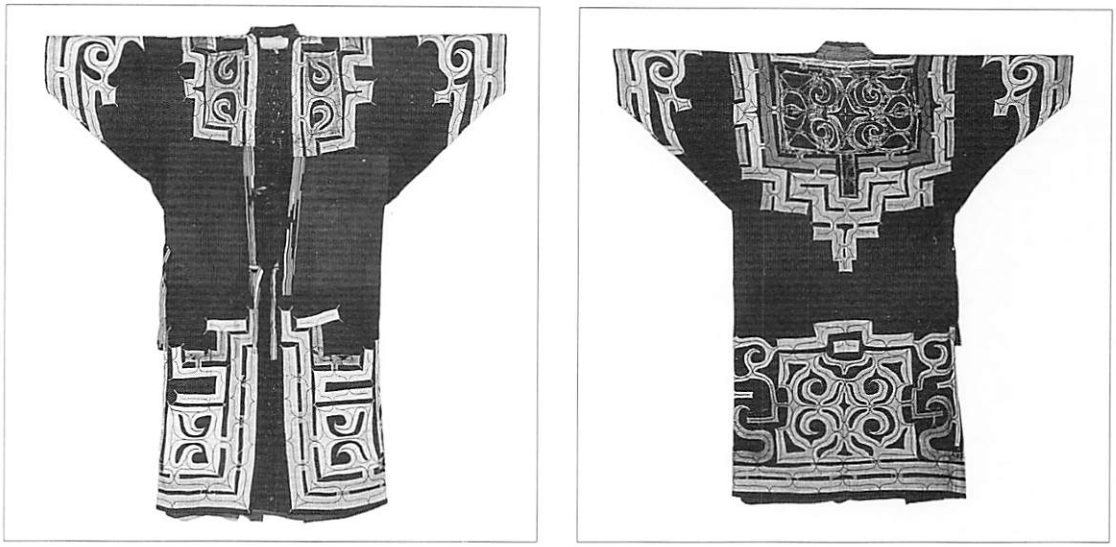
第3図　チカルカルペ　前，後



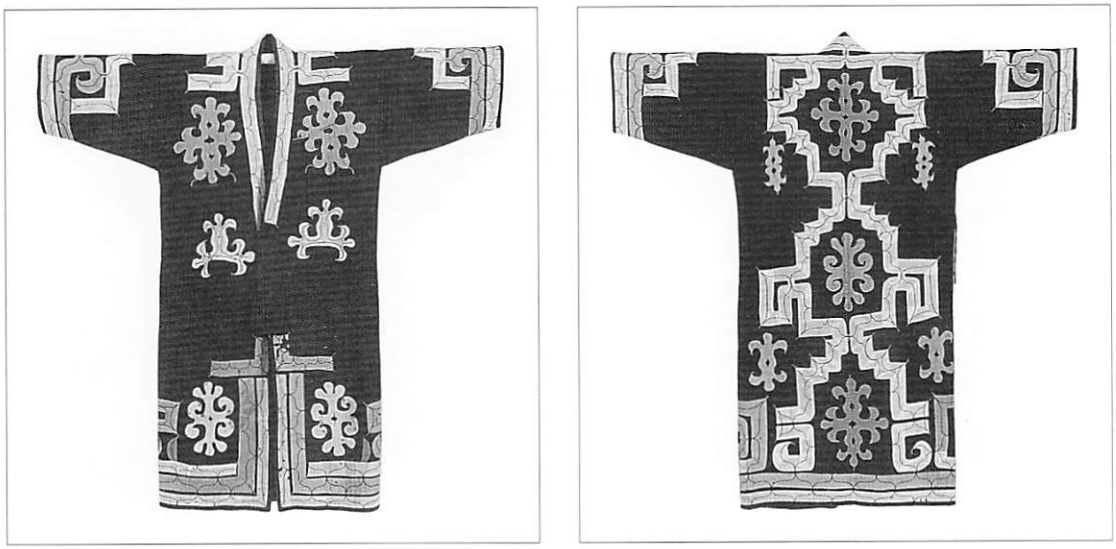
第4図　チカルカルペ　前，後



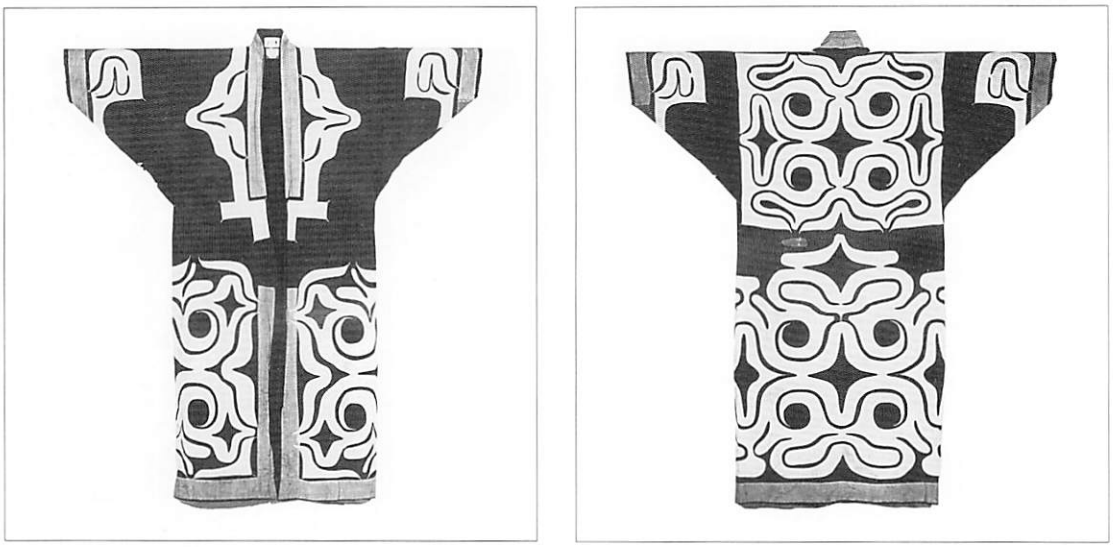
第5図　ルウンペ（虻田）前，後



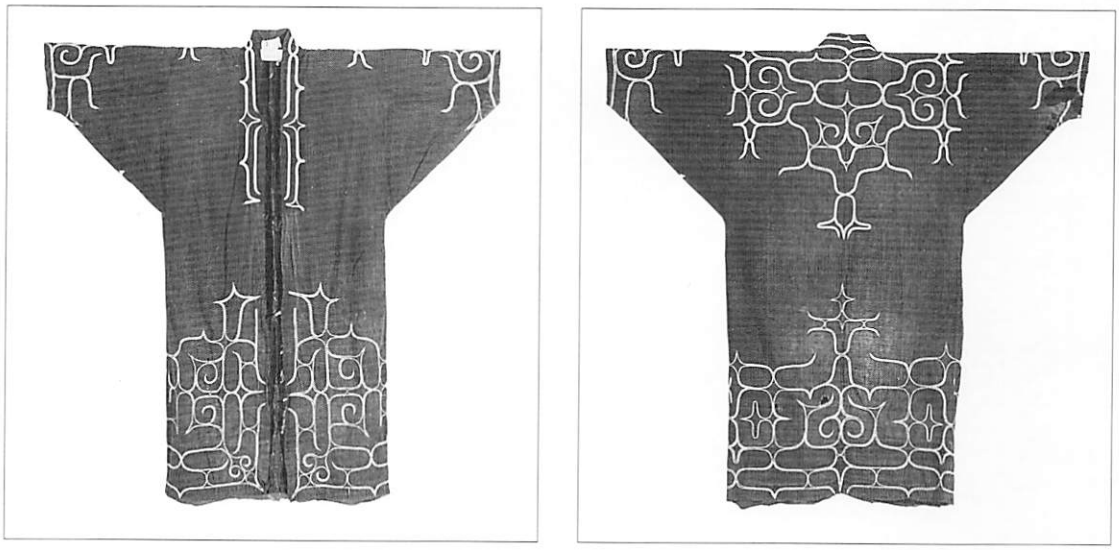
第6図　ルウンペ（白老地方）前，後



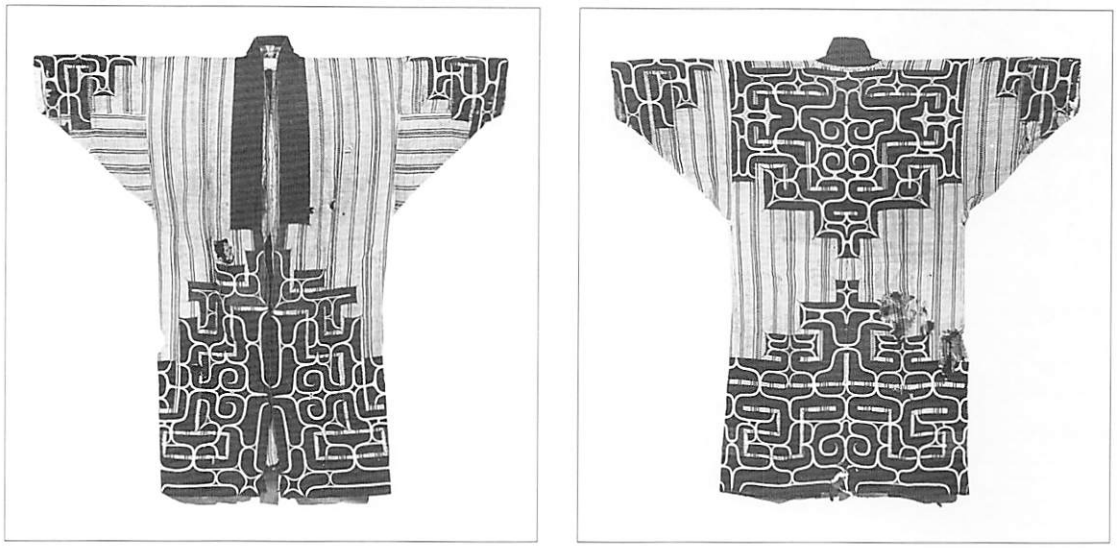
第7図　ルウンペ（噴火湾沿い）前，後



第8図　カパラミプ　前，後

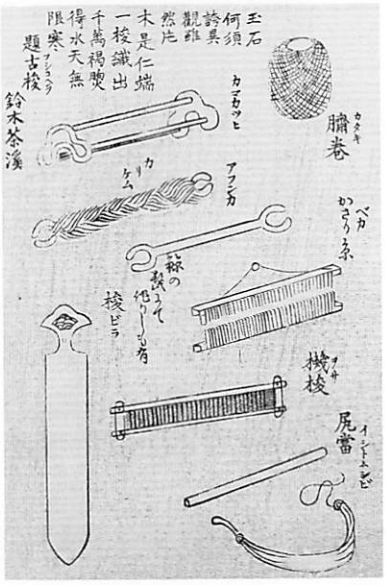


第9図　チヂリ　前，後

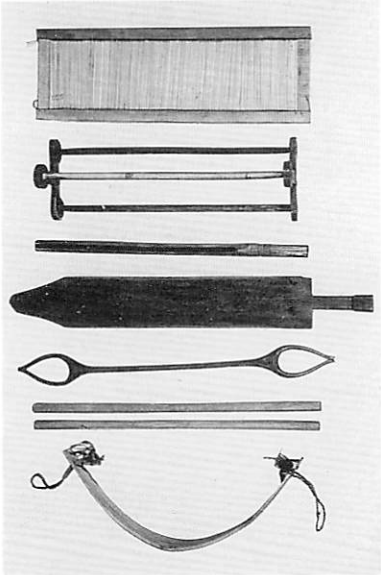


第10図　アツシ　前，後

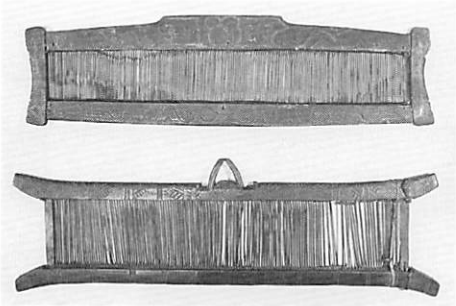
第11図　松浦竹四郎『蝦夷漫画』
「アツトシカルの図」
「アフンカルの図」



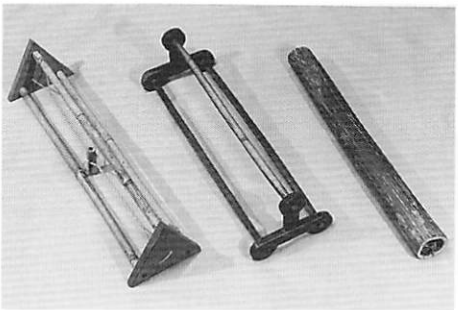
第12図　松浦竹四郎『蝦夷漫画』から
機具の図および名称
カタキ（腊巻）
カマカツヒ
カリケム
アフンカ
ベカ（かざり糸）
ヲサ（機梭）
イシトムシビ（尻當）
ビラ（梭）



第13図　アツシカルペ
上から順に
ウオサ
カマカップ
ペカウンニ
アツシペラ
アフンカニ
イツマムニ
イシトムシニ

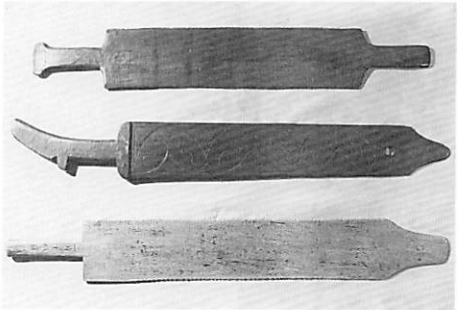


第14図　ウオサ

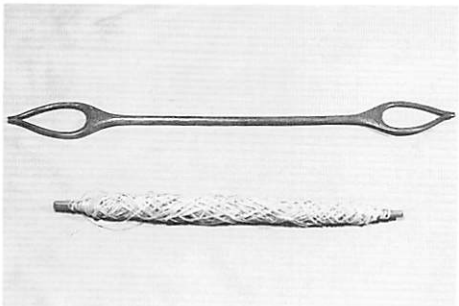


第15図　カマカップ
左端は両側が木材で中の棒は竹である。
中央のものは木製，右側はクッタルである。

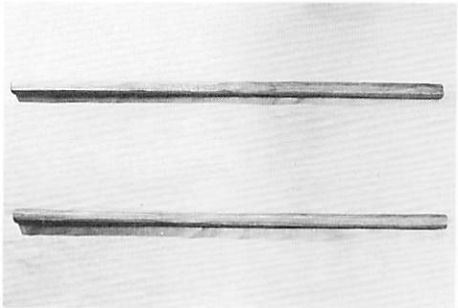
第16図　ペカウンニ
ペカウンニ三種，右端は糸をかけたもの。



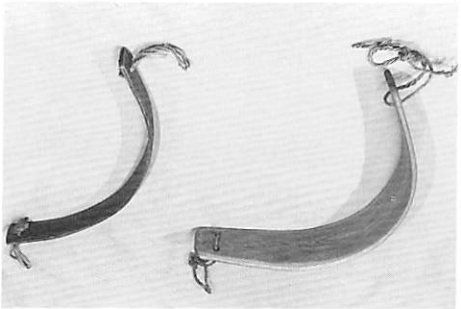
第17図　アツシベラ
（上）緯糸打ち込みのために刃が鋸歯状になっている。（中央）アツシベラの柄が変っている。（下）両端に柄がついているもの。



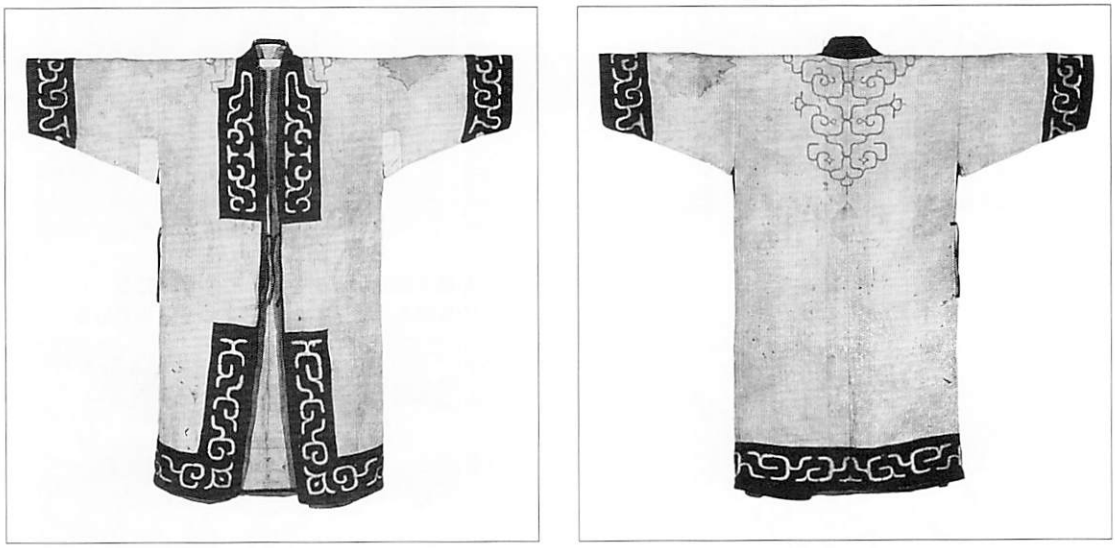
第18図　アフンカニ
（上）棒と平行に左右の股の中に糸が入るようにかける。（下）一本の棒に緯糸をかけたもの。



第19図　イツマムニ



第20図　イシトムシニ



第21図　レタルペ　前,後

立川ポイントに関する一考察

野　村　祐　一

＜はじめに＞

市立函館博物館には，有舌尖頭器の日本最初の報告である「立川遺跡」の発掘調査資料が収蔵されている。この資料は，1958年および1959年の市立函館博物館による発掘調査において発見されたもので，翌年『立川－北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査－』（吉崎編 1960）として発表されている。

有舌尖頭器とは，舌状の突起をもつ尖頭器のことである。有茎尖頭器の別称もあり，英語の Tanged point，Stemmed point がほぼこれにあたる。

北海道における有舌尖頭器は，旧石器時代終末に出現した特徴的な石器のひとつである。この時期には，さまざまな形態の石器が入れ替わり使用され，縄文時代へと移行して行くのであるが，この時期の人々は，当時の最先端・最大限の技術・思考・能力を随時駆使して道具を製作使用していたと考えられる。有舌尖頭器もそうした道具のひとつである。

本稿では，有舌尖頭器や立川ポイントに関する先学者たちの論考を基にして，立川遺跡出土の立川ポイントについて，特に形態的側面に着目しながら石器組成とともに分析し，さらに北海道南部の他の遺跡との比較を加えることで考えてみたい。

1．研究史

日本における有舌尖頭器の最初の報告は，既に述べたとおり1958年および1959年の蘭越町立川遺跡の発掘調査によるものである。吉崎昌一はこの調査で出土した特殊な形態の尖頭器に対し「立川形ポイント[1]」の名称を使用し，その特徴として，有舌尖頭器と柳葉形に近い形の尖頭器の２種類があり，特に有舌尖頭器の柄部の両側縁に磨痕があることを挙げている（吉崎編 1960）。また，各地点における石器組成の違いから第Ⅰ地点→第Ⅱ地点→第Ⅲ地点→第Ⅳ地点という変遷を予測[2]し，その編年的位置付けを細石刃の消滅から縄文土器の出現までの間を埋める旧石器時代終末期の石器文化とした。

同じ頃，本州では1958年に新潟県小瀬が沢洞窟遺跡（中村 1960），1959年に長野県柳又遺跡（樋口ほか 1965）など，また，北海道においても，1959年に赤井川村曲川遺跡

（名取・松下 1961），旭川市射的山遺跡（佐藤 1961）など有舌尖頭器を出土する遺跡が発見されるようになり，同時代の特徴的な石器である細石刃・細石刃核などとともに，旧石器時代から縄文時代への端境期についての研究が進むようになる。

北海道の有舌尖頭器についてまとめた山崎博信（1966）は，有舌尖頭器が遺跡における石器組成により幾時期かに分かれる可能性を指摘している。

日本における有舌尖頭器の最初の編年案は，芹沢長介（1966）が1965年の新潟県中林遺跡の成果を基に，全国各地の資料を加え，4時期による変遷を提示したものである。芹沢の編年観は，土器の有無を時期差としていること，有舌尖頭器が次第に小形化していき，その延長上に石鏃の発生を見ていることなどを軸としている。また，北海道の有舌尖頭器については，中林遺跡の有舌尖頭器の中に立川ポイントに類似した形態をもつものが認められることから，立川遺跡と中林遺跡は同時期であると考え，他の時期，形態のものは北海道では未確認であるとした。

この芹沢の編年案に対し，大井晴男（1970）は両遺跡の石器組成の違い，特に荒屋型彫器や石刃技法の有無や有舌尖頭器自体の相違などから，中林遺跡と立川遺跡の同時期・同系統性を否定している。

一方，小林達雄（1967）は長野県柳又遺跡の発掘調査の報告で有舌尖頭器の分析方法を提唱した。それは，基部幅を1とする身部と舌部の長さを比率であらわし，それに基づいた統計処理方法と形態模式図化，石材の統計，製作技術などによる統合的な分析方法である。さらにこれらの分析に基づき「範型（＝モデル）」と「模倣（＝コピー）」の存在を示唆し，製品とイメージを結び付けようとしたが，範型の存在や範型確立地の決定基準・根拠の設定が現在の研究では捉えられないのが現状である。

また，芹沢の編年観に見られるように，有舌尖頭器の延長上に石鏃の発生があるとする説が一般的であったが，鈴木道之助（1972）は愛媛県上黒岩岩陰遺跡出土の資料を基に，狩猟具と推定される有舌尖頭器の消滅と石鏃の出現との関連性について検討し，縄文時代草創期の狩猟活動の復原を試みた。そして，有舌尖頭器の機能が投槍の先であり，石鏃＝弓矢とは一線を画すものとし，その消滅を投射器として機能の近似した弓矢の普及によるものと考えた。

増田一裕（1981）は，本州・四国の出土例を中心に有舌尖頭器の再検討を行なっている。増田は，「広範囲な地域を対象として分類・分析を行なう際には統一的な分類基準が重要である」と考え，時期差や地域差を超越した共通要素を抽出し，それに基づいた分類を提案した。さらに，舌部の形態分類に小林（1967）の提唱した各部の長幅比による統計処理

の分類を加えて「型」を設定し，その地域性を明らかにしようとした。

栗島義明（1984）は，それまでの有舌尖頭器に対する研究方法が「型式学的検討と銘打ちながらも，単にその石器形態からあたかも階梯的に理解し，相互の型式的差異を空間に還元させていた傾向」にあるため，「型式学的研究を目指しながら，最終的には他の要素－たとえば土器共伴の有無や共伴する土器型式の時間的前後関係－に拠る編年へと導かれていたように思われる」と考え，有舌尖頭器自体の型式学的変遷を展開した。北海道の有舌尖頭器については主に舌部形状により6型式に細分し，大きく3階梯による変遷を提案している。また，その分布が北海道のみならず東日本一帯に広がる石器群であると位置付けている。

昭和60年代になると，北海道においても大規模な発掘調査により旧石器時代終末期の遺跡が相次いで発見されたため，有舌尖頭器の出土例が増加した。例えば，知内町湯の里4遺跡（畑編 1985），今金町美利河1遺跡（長沼編 1985），富良野市東麓郷1遺跡（杉浦 1987）などである。

横山英介（1986）は，こうした資料の増加を基に北海道の有舌尖頭器についてまとめている。横山は北海道の有舌尖頭器を立川型，エンガル型(3)，祝梅型(4)の3形態に分類し，立川型が「北海道のこの種の石槍の典型をなすもの」としている。これらは細石刃文化の一員として出現し，細石刃文化の終了後にも残ったが，その石器伝統は縄文時代早期の石器製作技法には受け継がれておらず，有舌尖頭器石器群が縄文文化の開始に直接結び付かないものであるとした。

杉浦重信（1987）は，富良野市東麓郷1遺跡出土の有舌尖頭器の一括資料を検討する際に，北海道の有舌尖頭器をまとめ，その分布や形態分類などについて述べている。杉浦は北海道の有舌尖頭器を大きさや形状から9形態に分類し，その内のⅡ型が基本型となり，Ⅱ型を細分した3つのタイプの組み合せの変化と石器組成を比較することにより，有舌尖頭器の編年的，系統的な位置付けができるとした。

2．立川遺跡の概要

立川遺跡は北海道磯谷郡蘭越町字立川，後志管内の日本海に流れる尻別川の支流昆布川の左岸段丘上の平坦面，標高約150mにあり，昆布川河床との比高差は約25mである。

1958年11月，芹沢を中心として市立函館博物館が6日間行なった第1次調査と，翌1959年5～6月に，吉崎を中心として9日間行なわれた第2次調査とにより，第Ⅰ地点～第Ⅳ地点の4ヵ所から立川ポイントや細石刃核などが発見され，旧石器時代終末期の遺跡とし

て知られている。

ここで，各地点における石器組成を第1表に従い順にみることにする[5]。なお，立川ポイントについてその石器群の石器組成を考えるために，立川ポイントの出土が認められた第Ⅱ地点および第Ⅲ地点については，特に詳細にみることにする(第2図，第2表)。

＜第Ⅰ地点＞

第Ⅰ地点で出土した石器は，細石刃29点，細石刃核5点，彫器7点，スクレイパー9点，錐形石器1点，舟底形石器2点，石刃35点，斧形石器3点，U－フレイク20点，チップ類223点の合計334点である。

第Ⅰ地点では立川ポイントは出土しておらず，細石刃，細石刃核，彫器，スクレイパーなどが石器組成の主体をなしている。また，細石刃核は，蘭越型細石刃核2点，オショロッコ型細石刃核2点，ホロカ型細石刃核1点で，彫器には荒屋型彫器を含む。スクレイパーには剥片を素材にした定形的なものがある。

＜第Ⅱ地点＞

第Ⅱ地点で出土した石器は，立川ポイント1点，細石刃核1点，彫器3点，スクレイパー20点，錐形石器3点，石刃1点，斧形石器1点，礫石器1点，チップ167点の合計198点である。

第Ⅱ地点での石器組成の特徴は，数は少ないが定形的石器がセットで出土していることで，その内，全体の60%以上を定形的なエンド・スクレイパーが占めている。立川ポイントは1点のみ出土している。また，細石刃はみられないが，オショロッコ型細石刃核が1点出土している。この細石刃核は，石器集中地点から離れて出土したもので，同一石器群としてみるには注意が必要である。彫器は3点出土しているが，荒屋型彫器が主なものである。また，局部磨製の斧形石器が1点出土していることも看過できない。

＜第Ⅲ地点＞

第Ⅲ地点で出土した石器は，立川ポイント17点，その他の尖頭器4点，彫器17点，スクレイパー13点，錐形石器1点，舟底形石器2点，石皿4点，礫石器4点，U－フレイク8点，チップ852点の合計922点である。

第Ⅲ地点での石器組成の特徴は，立川ポイント，彫器，スクレイパーの3器種が量的に主体をなしていることで，この3器種で定形的石器の2／3以上を占める。また，細石刃および細石刃核の出土は認められない。彫器はやはり荒屋型彫器がそのほとんどで，スクレイパーには定形的なものの他にいくつかの形態がある。その他，舟底形石器が2点，石皿が4点(すべて同一個体と推定される)出土している。

＜第Ⅳ地点＞

第Ⅳ地点で出土した石器は，スクレイパー６点，舟底形石器４点，石刃21点，チップ253点の合計284点である。

第Ⅳ地点においては，その石器組成は単純で定形的な石器が少なく，石刃が石器組成の主体を占めている。また，石刃の中には他の地点には見られない大形のものが含まれている。

以上，立川遺跡の第Ⅰ～Ⅳ地点における出土遺物の石器組成をみてみたが，その内容は各地点ごとに異なっており，相互に関連性を見出すことは難しい。特に，共に有舌尖頭器を有する第Ⅱ地点と第Ⅲ地点の石器組成の特徴を比べても，両地点が同一の性格をもつものと捉えるまでには至らないものと考える。

しかし，荒屋型彫器や定形的なエンド・スクレイパーなどは立川ポイントと密接に結び付いているものと考えられる。

なお，立川ポイントと他の石器との関係については，後に触れることとする。

３．型式と分類

ここでは，立川ポイントの形態について観察を行なうため，その形態的分類を試みた。

(1)　有舌尖頭器の各部位の名称　（第３図）

分類を行なう前に有舌尖頭器の各部位の名称を設定する。有舌尖頭器の各部位の名称は，増田（1981）によって整理されている。ここでは，増田による有舌尖頭器の各部位の名称を基に若干の修正を加え，以下の分析に使用する。

有舌尖頭器の形態は『身部』，『基部』，『舌部』の３つに大別される。身部はその先端を『先端部』，中程の部分を『胴部』とする。舌部はその末端を『舌端部』とする。基部は身部と舌部との結合部であり，基部の両端の角は『返し部』とする。

基部の形態は，舌部の身部への付加状態により区別される。第３図左は舌部が身部に直接つくもので，この場合の基部は両方の返し部を結んだ線上にあたる。第３図右は身部と舌部の間に段をもつが，この部分が基部にあたる。

(2)　部分型式の設定　（第４図）

有舌尖頭器の最たる特徴は，その舌部の作り出しの存在にある。舌部は，舌部自体の形態（舌部型式）と身部との接合形態（基部型式）により型式分類できる。そして，この２つの分類に身部の形態（身部型式）を加えることとし，これら３つの部分型式の組み合わ

せにより，有舌尖頭器の形態的特徴を捉え，分類しようと思う。

①身部型式

A：両側縁がゆるやかに外湾するもの。

B：両側縁が直線的で，三角形状を呈するもの。

C：基部から胴部にかけて両側縁が平行し，
　身部上半部に至り大きく湾曲するもの。

D：先端部が丸くおさまるもの。

②基部型式

Ⅰ：身部と舌部の間に段があるもの。
　段が突出するものと水平になるものとがある。

Ⅱ：身部に直接舌部がつくもの。

Ⅲ：身部と舌部の境が不明瞭なもの。

③舌部型式

1：舌部が棒状に伸びるもの。

2：舌部側縁がやや内湾し，逆三角形状を呈するもの。

3：舌部側縁がやや外湾するもの。

(3)　立川遺跡出土の立川ポイント　（第5図）

ここでは，先の部分型式を用いることにより立川遺跡出土の立川ポイントの型式分類を行なう。立川遺跡では破片を含め全部で18点の立川ポイントが出土しているが，その内，舌部および基部の形態の把握できる7点を抽出し，分類を行なうものとする。

その結果，以下の3形態に大きく分類することができた。

なお，個々の立川ポイントの番号は，第6図，第7図の番号と一致する。

立川A（1～3）

舌部長が比較的長く，段のある基部をもつものである。舌部両側縁には磨痕があり，舌端部は尖ることがなく切断されているか，丸くおさまっている。

1は，比較的小形で，返し部が突出するものである。このように返し部が突出するものは，北海道では他にみられない。左の返し部はわずかに欠損しており，本来は右の返し部と同様の形態であったようである。舌端部は切断され，わずかに調整加工がみられる。舌部両側縁は若干の調整加工ののちに磨かれている。この磨痕は返し部から舌端部の切断面

にまで続いている。身部両側縁は，特にその上半部において調整加工が顕著で，先端部は鋭く尖っている。

2は，身部上半が欠損しているが，基部および舌部の形態により1に類似するものとした。舌部が特に長く，磨痕はわずかである。右の返し部は欠損している。

3は，欠損が甚だしいが，折れの状態や残った基部の形態から立川Aの範疇に入るものとして取り扱った。1，2に比べ調整加工が顕著でなく，整形加工の段階の大きな剥離面が特に腹面に残っている。舌部は左側縁の大部分が欠損しており，わずかに基部の部分が残っている。また，左の返し部もわずかながら欠損している。舌部側縁は欠損部分以外はすべて磨痕が顕著である。1，2に比べ，若干幅広で全長も長かったと思われる。

部分型式の組合せとしては，A－Ⅰ－1である。

立川B（4，5）

舌部両側縁が内湾し，逆三角形状を呈するものである。やはり，舌部両側縁に磨痕がある。

4は，身部がゆるやかに外湾し，先端部はわずかに欠損しているが尖っているもので，立川Aよりも幅広のものである。基部の上7㎜ほどの部分で2つに大きく割れており，右の基部の上が大きく破損している。舌部両側縁は基部からゆるやかに内湾し，丸い舌端部につながっており，調整加工の後に磨かれている。

5は，欠損が著しいが，舌部の形状から4に類似するものとした。基部は両側縁ともに欠損している。舌部側縁は内湾し磨痕が著しく，特に舌端部のそれが顕著である。

部分型式の組合せは，A－Ⅱ－2である。

立川C（6，7）

基部が不明瞭で，比較的大形のものである。舌部の作り出しがなく，有舌尖頭器の形態になっていないが，舌部と思われる部分の両側縁に磨痕があることから，立川ポイントの範疇に入れた。

6は，身部上半を欠損している。基部の場所が不明瞭であるが，舌端部から30㎜程上までの部分の両側縁にわずかながら磨痕がみられる。

7は，10㎝を超えるもの大形のもので，舌端部の割れから20㎜程上の部分にかけてわずかながら磨痕がみられる。また，身部上半は一度すぼまってから舌状に丸くおさまる。先端部には腹面からの二次加工がなく，背面のそれも大まかなものであり，未製品の可能性

もあり得る。

部分型式の組合せは，A－Ⅲ－3としておく。

以上，立川遺跡出土の立川ポイントについて，部分型式を用いて3形態に分類することができた。全体的に欠損品が多く，形状を推定しての分類であり，特に，身部型式については不明確であると思われるが，他の遺跡で出土した有舌尖頭器の形態を参考にして設定した部分もある。

なお，立川遺跡では出土していないが，「エンガルポイント」とされる小形の有舌尖頭器の部分型式の組合せとしては，C－Ⅰ－1などとなろう。

また，身部型式Dの先端部が丸くなる「祝梅型有舌尖頭器」の存在も指摘されており，部分型式の組合せとしては，D－Ⅰ－1と考えられる。

4．北海道南部における有舌尖頭器

ここでは，前章で立川遺跡出土の立川ポイントについて行なった分類を，有舌尖頭器が出土した北海道南部におけるいくつかの遺跡にもあてはめることで，各遺跡における型式，石器組成などとの比較を試みることにする。

北海道における有舌尖頭器の出土分布については杉浦（1987）がまとめているように，北海道では約50遺跡において有舌尖頭器が出土しているが，その分布は北海道北東部に偏っており，北海道南部での有舌尖頭器の出土例は9遺跡と少ない。

このうち，発掘調査により有舌尖頭器を含む石器群として石器組成が確かなものを選択して立川遺跡との比較の対象とする。この条件に見合う遺跡として，知内町湯の里4遺跡（畑編 1985），今金町美利河1遺跡（長沼編 1985），同町神丘2遺跡（寺崎 1990），千歳市メボシ川2遺跡（田村・西尾 1983）が挙げられる。

この他，北海道南部では乙部町仙台野遺跡（大沼編 1976），登別市川上B遺跡（畑編 1983），赤井川村曲川遺跡（名取・松下 1961），千歳市祝梅上層遺跡（吉崎 1978）においても有舌尖頭器が出土しているが，有舌尖頭器を含む石器群が不明であったり有舌尖頭器単独の出土であったりするため，除外することにした。

まず，各遺跡における石器組成と有舌尖頭器の分類についてみることとする。

立川遺跡では，既にみたとおり，第Ⅱ地点および第Ⅲ地点において有舌尖頭器（立川ポイント）が出土しており，その石器組成は，第Ⅱ地点では有舌尖頭器，彫器，掻器，錐形石器，斧形石器などで，オショロッコ型細石刃核が伴う可能性がある。第Ⅲ地点では有舌

尖頭器，その他の尖頭器，彫器，掻器，錐形石器，舟底形石器，石皿などで，有舌尖頭器は前章のとおり，立川A（A－Ⅰ－1），立川B（A－Ⅱ－2），立川C（A－Ⅲ－3）の3形態に分類できた。その他に形態不明の破片が11点ある。

湯の里4遺跡では，5点の有舌尖頭器が出土しており，その内2点は立川Aのもの，その他はC－Ⅱ－2，B－Ⅰ－3，不明が各1点ずつである。主な石器組成は，有舌尖頭器，その他の尖頭器，彫器，掻器，錐形石器，舟底形石器，斧形石器，石皿などである。

美利河1遺跡では，6点の有舌尖頭器が出土しており，その内2点が立川A，3点は立川B，不明1点に分類できる。ただし，立川Aとしたものは，製作途中の未製品の可能性があり，また，立川Bのものは，基部幅20㎜以下のスリムなものである。石器組成は，有舌尖頭器，その他の尖頭器，細石刃，細石刃核，彫器，掻器，削器，錐形石器，斧形石器などである。

神丘2遺跡では，B－Ⅰ－3に分類できる有舌尖頭器が1点出土している。石器組成は，有舌尖頭器，その他の尖頭器，彫器，掻器，錐形石器，舟底形石器，斧形石器などである。

メボシ川2遺跡では，3点の有舌尖頭器の破片が出土している。舌部型式1と2に相当するものが各1点，身部型式Dに相当する破片が1点出土している。舌部型式1のものには舌部側縁に磨痕がある。石器組成は，有舌尖頭器，細石刃，細石刃核，彫器，掻器，錐形石器，斧形石器などである。

次に部分型式により分類された各形態の有舌尖頭器について，その出土状況をみてみる。

立川ポイントA～Cのうち，立川Aは立川遺跡のほか，湯の里4遺跡，美利河1遺跡などで出土例が見られ，立川Bは立川遺跡，美利河1遺跡において出土している。立川Cは北海道南部においては立川遺跡の他に出土例はない。

また，立川遺跡にはみられない組合せをもつものとして，次の3つのものがある。

B－Ⅰ－3は，湯の里4遺跡，神丘2遺跡で出土しており，両資料とも全長100㎜を超える大形で幅広のものである。

C－Ⅱ－2は，湯の里4遺跡において出土が認められた，大形のものである。

また，身部型式Dのものがメボシ川2遺跡にあるが，破片のため基部，舌部の形態は不明である。

＜まとめ＞

立川遺跡出土の立川ポイントおよび北海道南部における有舌尖頭器について，その形態

と石器群の組成について記述してきたが，これらをまとめ，若干の考察を加える。

まず，北海道における有舌尖頭器の代表とされていた立川ポイントが，その標識遺跡である立川遺跡において大きく3つの形態に分けることができた。

北海道における有舌尖頭器の変遷については，異なった形態の有舌尖頭器が層位的上下関係をもって出土することがほとんどなく，また，本州とは違い，土器との共伴が確実視されていない現状[6]では，石器組成の内容を重要視する必要があろう。

立川Aを有する遺跡では有舌尖頭器以外の尖頭器が伴い，立川Bの遺跡では細石刃核を共伴するという特徴を見出すことができる。

立川遺跡第Ⅰ地点では蘭越型細石刃核とオショロッコ型細石刃核とが共伴し，第Ⅱ地点ではオショロッコ型細石刃核と立川Bが共伴する可能性がある。しかし，蘭越型細石刃核と立川ポイントが共伴する確実な証拠はない。つまり，オショロッコ型細石刃核がある程度の時間幅をもって，蘭越型細石刃核の石器群や立川Bの石器群の器種構成の一員となっていた可能性が考えられる。

一方，身部型式Dの「祝梅型」有舌尖頭器はオショロッコ型細石刃核との共伴関係が認められるが，その他の有舌尖頭器との共伴関係が不明確なため立川ポイントとの新旧関係については，今後の資料の増加を待ちたい。

また，湯の里4遺跡や神丘2遺跡などでみられた大形の有舌尖頭器については，北海道北東部において数は少ないが類例があり，細石刃（核）との共伴がみられないことから立川Aおよび立川Bなどよりは新しいものと考える。

以上，立川遺跡出土の立川ポイントを中心に北海道南部における有舌尖頭器について，その型式分類および石器組成などからその変遷を考えてみたが，対象地域を北海道南部に限ったことや，有舌尖頭器自体の分類に終始したことで，マクロな視野での考察ができなかった。今後の課題としたい。

［註］

(1) 立川ポイントという呼称は，永い間北海道の有舌尖頭器全体を指していたが，研究者により「立川型」あるいは「立川系」有舌尖頭器などの用語を用いて石器群全体を大系的に捉えようとする動きもある。本稿では，立川遺跡出土のものについてのみ立川ポイントという呼称の使用を限定し，その他については有舌尖頭器の用語を用いることとする。

(2) 横山（1971）は，吉崎のこの編年に対し，層位的観点から全地点が同一時期の所産である可能性を示唆しており，また，吉崎（1978）も後に修正を加えている。

(3) 横山は，エンガルポイントについて，最初の報文以後資料の増加がみられないことや形態的・製作技術的特徴などから，欠損した立川型の再加工品である可能性を指摘している。これに対し，杉浦（1987）は，エンガルポイントを再加工品と判断するのが妥当であるとしながらも，その中には形の整ったものがあることなどから，その独立性を示唆している。

(4) 「祝梅型」有舌尖頭器は，1970年の千歳市祝梅上層遺跡でオショロッコ型細石刃核，荒屋型彫器，エンド・スクレイパーなどに共伴した先端部の丸い有舌尖頭器状石器である（吉崎 1978，千葉 1981）。石器組成が有舌尖頭器文化と共通しており，同時期もしくは近接した時期のものと考えられる。

(5) 石器組成については，その大概を報告書に拠った（吉崎編 1960）が，定形的な石器についてはできる限り現在の器種名に変更を試みた。例えば，報告書の「立川形ナイフ」は報告者も後に訂正している（吉崎 1978）ように彫器として取り扱った。しかし，各石器の出土地点が不明なものもあり十分な再分類ができなかった。

(6) 北海道における有舌尖頭器と土器との共伴については，荒屋型彫器や細石刃などと同一包含層中から2点の無文土器の出土が認められた訓子府町増田遺跡（鶴丸 1975）や，同町日出－11遺跡の範囲確認調査時に出土した土器片（橋爪 1985），富良野市東麓郷1遺跡で出土した無文と思われる土器（杉浦 1987）などの例がある。しかし，層位的，形態的観点から共伴が確実視されておらず，決定的なものとはされていない。

［参考文献］

石井浩幸 1989 「有舌尖頭器の研究とその見通し」『山形考古』4－2

上野秀一・加藤　稔 1973 「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学』9

上野秀一・宮塚義人 1976 「北海道余市郡赤井川村都遺跡出土の石器群について」『北海道考古学』12

宇田川洋 1977 『北海道の考古学』1

大井晴男 1970 「いわゆる「有舌尖頭器」について」『北海道考古学』6

大井晴男 1973 「先土器時代石器群における型式論的処理について」『北海道考古学』9

大沼忠春編 1976 『元和』乙部町教育委員会

岡村道雄 1990 『日本旧石器時代史』

加藤晋平・畑　宏明・鶴丸俊明 1970 「エンド・スクレイパーについて」『考古学雑誌』55－3

加藤晋平・鶴丸俊明 1973 『大昔のくんねっぷ』1 訓子府町教育委員会

加藤晋平・藤本　強 1969 『一万年前のたんの』端野町教育委員会

加藤　稔 1978 「有舌尖頭器についての覚書」『弓張平B遺跡1次，2次発掘調査報告書』

木村英明 1978 「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」『北海道考古学』14

栗島義明 1984 「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』62

栗島義明 1986 「『渡来石器考』－本ノ木論争をめぐる諸問題－」『旧石器考古学』32

小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」『信濃』19－4

小林達雄 1975 「東日本の旧石器文化」『日本の旧石器文化』2

佐藤忠雄 1961 『射的山』永山町

佐藤訓敏・北沢　実 1986 『帯広・空港南B遺跡』帯広市教育委員会

島立　桂 1988 「「本ノ木論争」とその周辺」『旧石器考古学』37

白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について（上），（下）」『考古学ジャーナル』126，127

白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』

杉浦重信 1987 『東麓郷1・2遺跡』富良野市教育委員会

鈴木道之助 1972 「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』76

鈴木保彦 1974 「本州地方を中心とした先土器時代終末から縄文草創期における石器群の様相」『物質文化』23

芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』2

竹岡俊樹 1989 『石器研究法』

田村俊之・西尾和文 1983 『メボシ川2遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会

千葉英一 1981 「石狩低地帯における旧石器文化」『北海道考古学』17

千代　肇 1985 「北海道南部の考古学」『北海道の民族と文化』

鶴丸俊明 1975 「増田遺跡」『日本の旧石器文化』2

寺崎康史 1990 『神丘2遺跡』今金町教育委員会

長沼　孝編 1985 『今金町美利河1遺跡』北海道埋蔵文化財センター

中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』

中村孝三郎 1978 『越後の石器』

名取武光・松下　亘 1961 「余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告（第二報）」『北方文化研究報告』16

橋爪　実 1985 『日出－11遺跡』訓子府町教育委員会

畑　宏明編 1983 『川上B遺跡』北海道埋蔵文化財センター

畑　宏明 1984 「湯の里4遺跡の台形石器」『考古学ジャーナル』233

畑　宏明編 1985 『湯の里遺跡群』北海道埋蔵文化財センター

樋口昇一・森島　稔・小林達雄 1965 「木曽開田高原における縄文以前の文化」『信濃』17－6

増田一裕 1981 「有舌尖頭器の再検討」『旧石器考古学』22

宮　宏明編 1985 『広郷8遺跡（Ⅱ）』北見市

山崎博信 1966 「北海道における有舌尖頭器について」『北海道考古学』2

山内清男 1964 『日本原始美術』1

山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』14－13

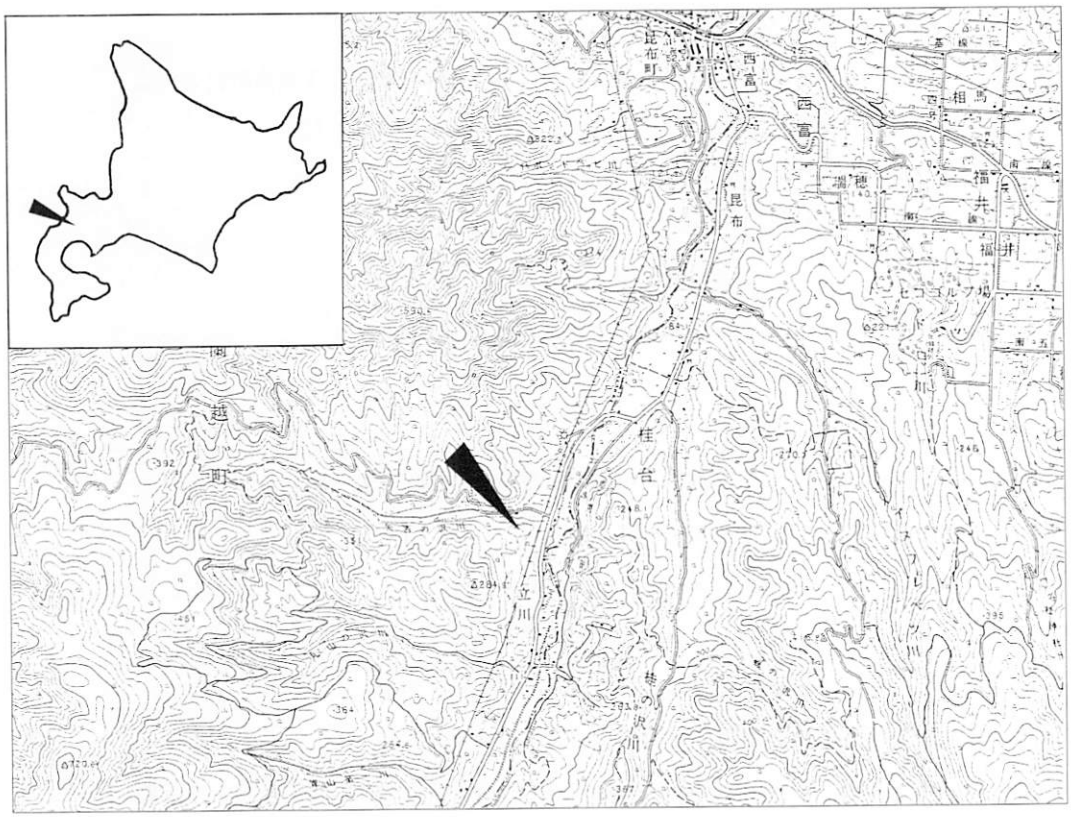
横山英介 1971 「北海道の旧石器時代文化について」『北海道考古学』7

横山英介 1986 「北海道の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』258

吉崎昌一編 1960 『立川』市立函館博物館

吉崎昌一編 1973 『タチカルシュナイ遺跡 1972』遠別町教育委員会

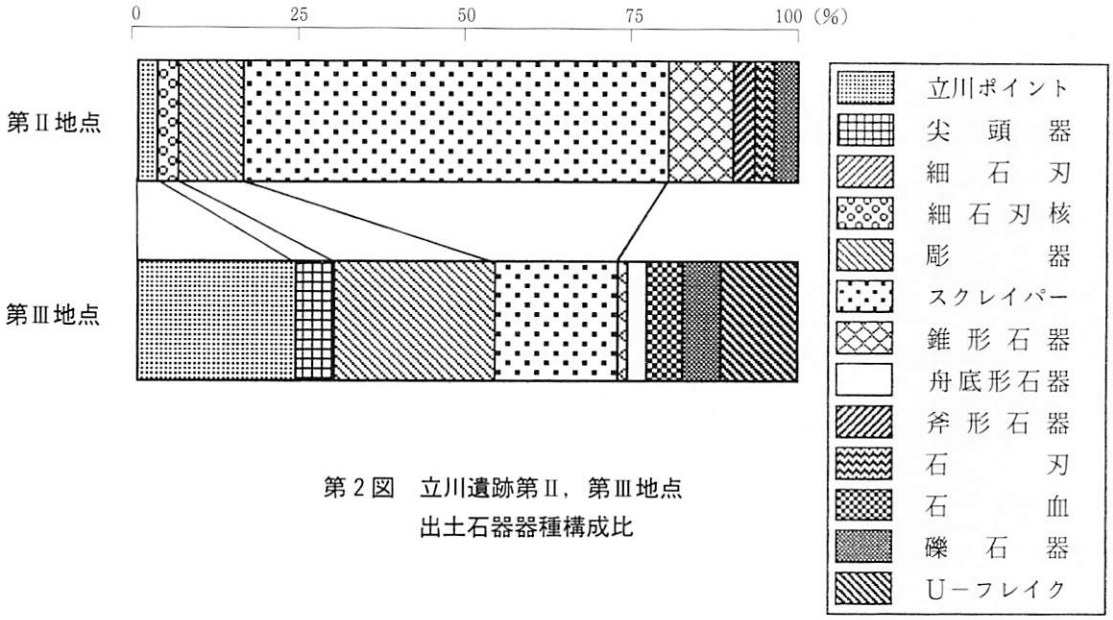
吉崎昌一 1978 「立川以後」『立川（復刻）』



第1図　立川遺跡の位置（地図は国土地理院発行5万分の1地形図「ニセコ」を縮小して使用）

第1表　立川遺跡出土石器一覧

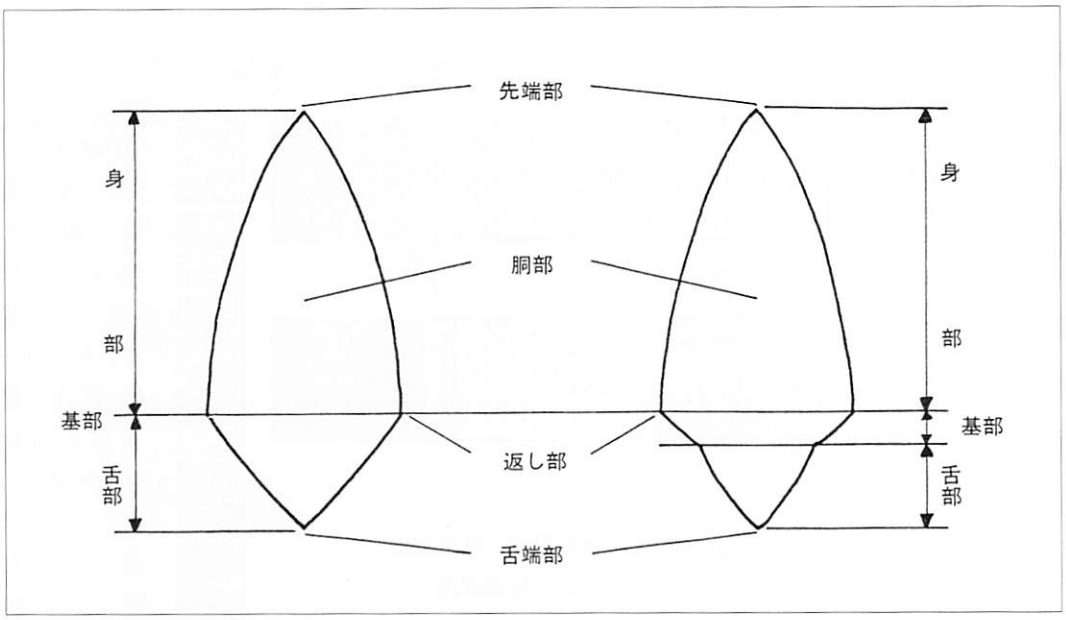
器種 / 地点名	立川ポイント	尖頭器	細石刃	細石刃核	彫器	スクレイパー	錐形石器	舟底形石器	石刃	斧形石器	石皿	礫石器	U－フレイク	チップ	合計
第Ⅰ地点			29	5	7	9	1	2	35	3			20	223	334
第Ⅱ地点	1			1	3	20	3		1	1		1		167	198
第Ⅲ地点	17	4			17	13	1	2			4	4	8	852	922
第Ⅳ地点						6		4	21					253	284
合　計	18	4	29	6	27	48	5	8	57	4	4	5	28	1495	1738



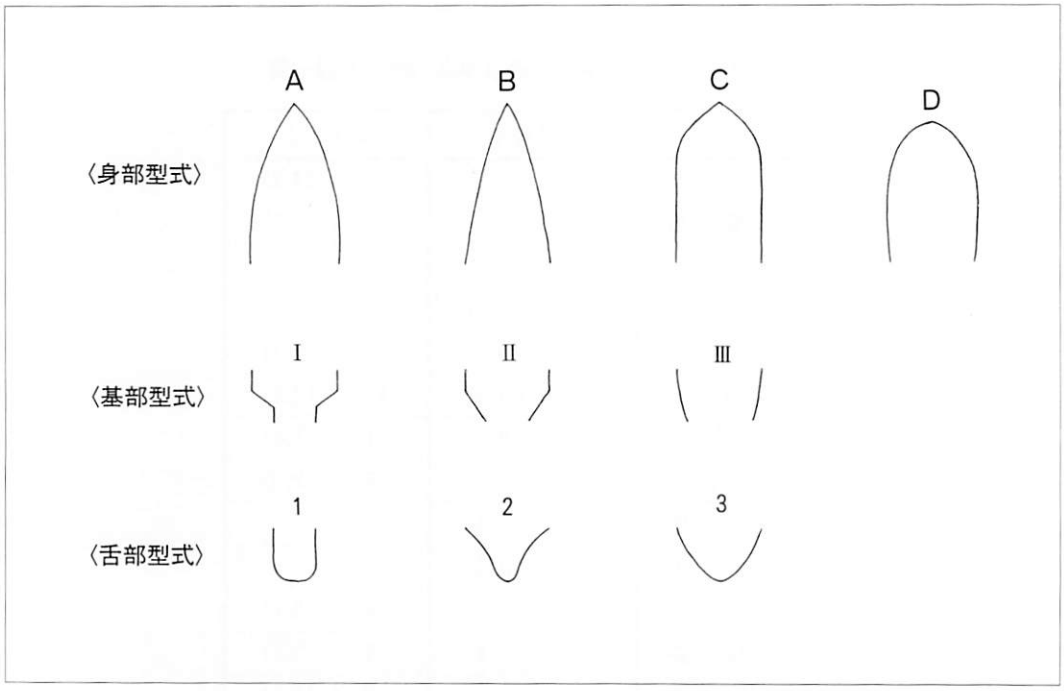
第２図　立川遺跡第Ⅱ，第Ⅲ地点
出土石器器種構成比

第２表　立川遺跡第Ⅱ，第Ⅲ地点の出土石器一覧

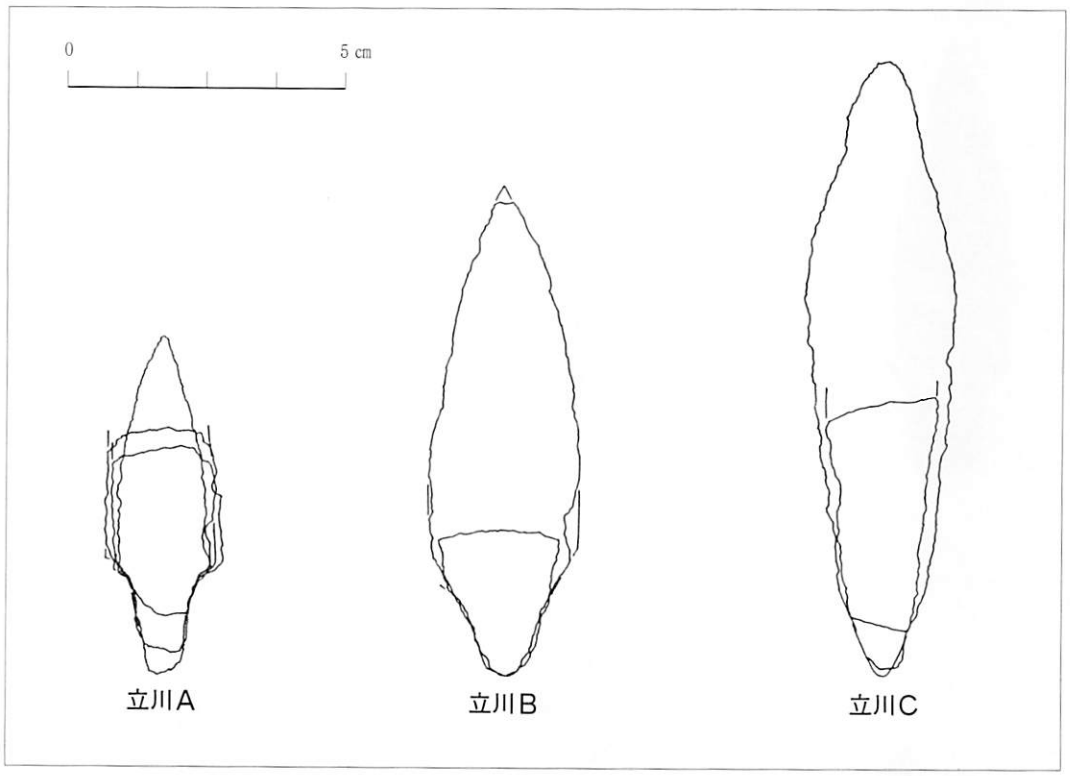
器種名	第Ⅱ地点	第Ⅲ地点
立川ポイント	1（3.2）	17（24.2）
尖頭器		4（5.7）
細石刃		
細石刃核	1（3.2）	
彫器	3（9.6）	17（24.2）
スクレイパー	20（64.5）	13（18.5）
錐形石器	3（9.6）	1（1.4）
舟底形石器		2（2.8）
斧形石器	1（3.2）	
石刃	1（3.2）	
石皿		4（5.7）
礫石器	1（6.4）	4（5.7）
U－フレイク		8（11.4）
合計	31（100%）	70（100%）



第３図　有舌尖頭器の各部位の名称



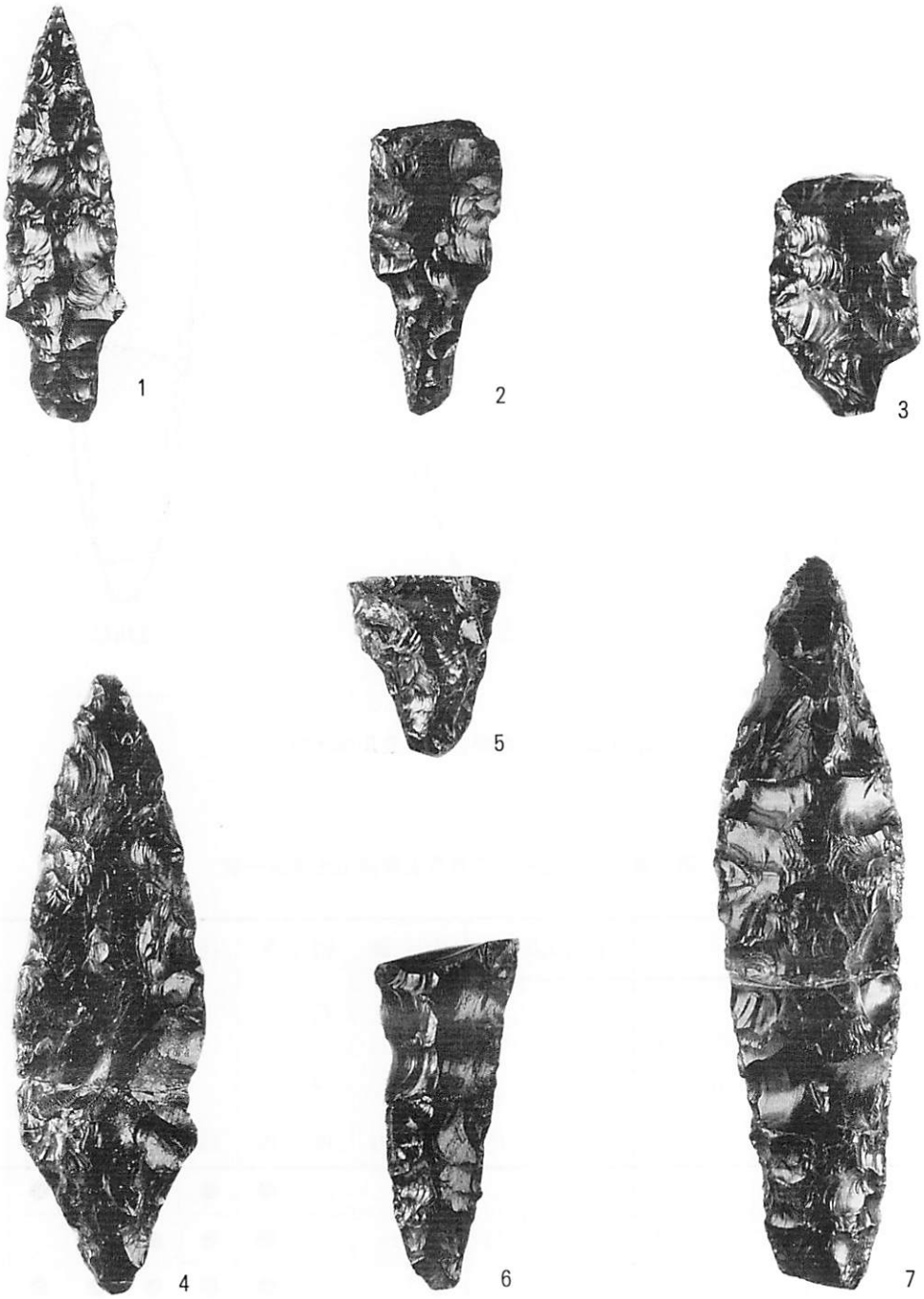
第４図　有舌尖頭器の部分型式



第５図　立川遺跡出土の立川ポイント

第３表　北海道南部の有舌尖頭器出土遺跡一覧

器種 / 遺跡名	立川ポイント			有舌尖頭器			尖頭器	細石刃	細石刃核	彫器	掻器	錐形石器	舟底形石器	斧形石器	石皿
	立川A	立川B	立川C	BⅠ3	CⅡ2	その他									
立川Ⅱ		1							○	●	●	●		●	
立川Ⅲ	3	1	2			11	●			●	●	●	●		●
湯の里4	2			1	1	1	●			●	●	●	●	●	●
美利河1	2	3				1	●	●	●	●	●	●		●	
神丘2				1			●			●	●	●	●	●	
メボシ川2						3		●	●	●	●	●		●	



第６図　立川遺跡出土の立川ポイント（背面）

写真はほぼ原寸大

第７図　立川遺跡出土の立川ポイント（腹面）

写真はほぼ原寸大

装幀

- 吹貫玄関。函館で最初に開かれた博物館の入口である。開拓使函館支庁仮博物場は，明治11年６月に竣工して翌年５月25日に開場し，函館仮博物場と呼ばれた。

  和洋折衷木造建築で現存する博物館として最も古く北海道指定有形文化財となっている。

- 体裁は，明治23年６月に引継がれてきた合衆国博物館報告書の中で最も古い1867年ワシントン発行のデザインである。

市立函館博物館 研究紀要　第５号

１９９５年３月３１日　発行

編集・発行　市立函館博物館

〒040　北海道函館市青柳町17番１号

TEL 0138－23－5480

印刷所　㈲ 久保内印刷所

〒040　北海道函館市豊川町７番26号

TEL 0138－22－2678

BULLETIN

OF

HAKODATE CITY MUSEUM

No. 5

CONTENTS

Preface

MARI KODAMA : The Costumes of the Ainu Peoples

YUICHI NOMURA : A Consideration of the Tachikawa Point

HAKODATE :

1995